

# 第8回 中堅研究員研修会 報告書

平成19年1月

地方シンクタンク協議会

## 産学連携と地域再生～シンクタンクの役割～

総合研究開発機構 研究開発部  
総括主任研究員 小野 稔

中央集権から地方分権への変革が課題となっている中で、地域自らが地域再生・活性化を考え、実行する時代となりつつある。「四番・エースがないから勝てない」と野球界では言われるが、「新幹線・高速道路がないから」と言っても始まらない。地域を取り巻く環境が厳しいなか、地域で何ができるのかを地方シンクタンクは多かれ少なかれ考えている。その一翼を担う中堅の研究者たちが集う研修会にコーディネーターとして参加させていただき、誠に光栄なことと感じている。2日間にわたる議論を終えて感じたことを述べたい。

「産学連携と地域再生～シンクタンクの役割～」が今回の課題であった。登場する主体が「産」、「学」、「シンクタンク」の三者（場合によっては「官」も加えた四者）、要素として「産学連携」、「地域再生」、「シンクタンクの役割」を含む。一般的に「産学連携」は「学」の知識と「産」の技術が結びつくというものであり、彼らが居を構える「地域」とは独立する要素だ。研修会の基調講演で日本福祉大学知多半島総合研究所の山本さんから、地域ガイドブックの発行、ボランティアガイド活用を通じた地元民との交流、江戸時代の食（尾州早すし）の復元など地域再生・活性化の数々の取り組みについて紹介していただいたが、同研究所が成功事例を積み重ねていることに参加者は強い刺激を受けたのではないだろうか。ただ、同研究所は大学でありシンクタンクでもある。しかも、地域の研究を謳い、知多半島の調査・研究に特化している。今回のテーマで足りないのは「産」だけだ。今回の課題が研修会参加者にとって難題だったのは、彼らは「学」ではないため、「産」と「学」の要素を組み合わせる必要があったためだ。

こうした中、各グループともゼミナールの雰囲気の中、活発な議論が交わされ、「創造産業を育成し、中心市街地を再生する」、「グリーンツーリズムや農産物の高付加価値化など第一次産業を核にした地域再生」、「地場産品のブランド創出と地域活性化」という問題設定となったが、限られた時間の中で手際よく議論を進め、まとめあげたことに感心している。

詳細については、各グループが作成した後掲の資料をご覧ください。シンクタンクの役割について最後に一言触れたい。地方シンクタンクの強みは何といても地域を知っていることであるが、これをどのように活性化に結びつけるべきかをシンクタンクは考えなければならない。シンクタンクの役割として、政策や事業を提案する頭脳的機能を発揮するのは当然だが、研修会で各グループとも強調しているのは、地域にある人材、知識、技術を結びつけるというコーディネート機能だ。最近地域への貢献を謳う大学や企業も出てきているが、あくまで副次的な活動である。これらの地域の様々なプレイヤーの性格や行動を知り、彼らを地域再生・活性化という方向に揃えるため、いかに磁場を張り巡らすかがシンクタンクの腕の見せどころである。“四番”不在でもスモールベースボールで勝利を呼び込むベンチワークを地域のシンクタンクには期待したい。

## 中心市街地の再生 ～地域発「創造産業」の育成を通じて～

財団法人宮城地域振興センター 研究員	小林 良人
財団法人北陸経済研究所 主任研究員	塚田 邦夫
財団法人堺都市政策研究所 主任研究員	芝原 功
総合研究開発機構 主任研究員	飯笹佐代子
財団法人とっとり政策総合研究センター 研究員	安達 義通
( グループリーダー )	

### 1. テーマ設定と基本的な考え方

#### (1) 基本的な考え方

平成18年度中堅研究員研修会で我々に与えられたテーマは、「産学連携と地域再生 ～シンクタンクの役割」である。このテーマに答えるに当たって、まず、我々が議論したのは、産学連携と地域再生の関係をどう捉えるかであった。一般的に、産学連携とは、大学の、特に、理工学系の、最先端の研究と地場企業の持っている生産技術を連携させることを指し、この連携を通して高付加価値型商品が開発・生産され、地域企業の競争力が高



まる、というシナリオが描かれがちである。その場合、最先端の研究動向と地域企業の技術蓄積を把握し、そのマッチングに貢献することがシンクタンクの役割となる。しかしながら、このようなアプローチは、広く地域振興に貢献するというより、個別企業の利益を優先したものに留まりがちになる。そこで、我々は、目的を、(個々の)地場企業の競争力強化ではなく、「地域再生」に定めた。次に「地域再生」という目的を達成するに当たり、「産」及び「学」がどのように貢献できるのかという順序で議論を行った。このように考えれば、個々の企業を越えた公共的な目的である地域再生に強く貢献できる提案が可能であると認識したためである。

#### (2) 地域再生の中心テーマとしての「中心市街地」

次に目的である「地域再生」について議論した。「地域再生」といっても漠然としており、地域のなかのどの領域に問題が生じていて、何を再生する必要があるのか、明確にする必要があった。そこで、我々は、「地域問題」のなかでも「中心市街地」にフォーカスを当てることとした。その

理由は大きく以下の3つに大別される。1つ目は、多くの地方都市で中心市街地が衰退しているという事実である。現在、どこの地方都市の中心市街地も、人口は減少し、経営者の高齢化は進み、閉鎖店舗が多い「シャッター街」と化しており、活気を失っている。我々は、このように全国に普遍的に見られる問題に焦点を当てることによって、多くの地域に応用可能な提案を行うことができる、と考えた。2つ目は、これまでの中心市街地の活性化への取り組みがあまり成功していないという事実である。例えば、2004年9月総務省は、中心市街地の活性化施策に対する行政評価を行っているが、ほとんどの都市においてあまり効果がでていないというネガティブな評価を与えている。我々が、これまでの中心市街地の活性化手法を越える提案を行うことができれば、微力ながらも、中心市街地問題に貢献できると考えた。3つ目は、このような中心市街地活性化の効果の低さを受けて、政府はまちづくり三法の改正に取り組んでいる。このような政府の中心市街地への取り組みの熱心さは、依然として中心市街地を国家的に重要な問題だと見なしていることを示唆しており、今後も全国各地で取り組まれることが予想される最もタイムリーなトピックであると考えた。

### (3)その他の狙い

もちろん、地域の問題は中心市街地だけではない。そこで、我々は中心市街地の問題を中心市街地の活性化に限定して考えるのではなく、中心市街地に注目しつつも、地域が抱える他の問題も複合的かつ総合的に考えながら、中心市街地の問題を解決するという視点に着目した。すなわち、中心市街地は、地域の中心あるいは地域の顔であり、したがって、中心市街地を地域住民が様々な活動を行うための「舞台」であるという発想を持った。我々は、この舞台において、解決すべきあるいは解決に寄与するような問題として、以下の3つに着目した。

#### 情報発信力の強化

近年、東京一極集中化が進行していると言われており、その結果、地域の情報発信力は衰退している。地域の情報発信力を強化するためには、地域の中心にある中心市街地における情報発信力を高める必要があると思われる。このような観点から、我々は、地域の情報発信力を高める拠点として、中心市街地の活性化を図るべきだと考えた。

#### 地元大学卒業生の定着

地方都市においては、若者は大学進学時に県外へ流出し、Uターンする人材は少ない。その結果、優秀な人材の流出が著しい。これが地方の中心街を活気に乏しいものとし、新産業を創出するような環境を形成できない理由のひとつになっていると思われる。一方、地方都市に立地する大学には、他県からも優秀な若者が進学しており、大学在籍中には地方都市に留まっている。しかし、大学卒業後は、就職のため、出身地もしくは3大都市圏などに移動している。

我々は、このような若者が地域に定着するような仕組みができれば、地域の再生に寄与できると考える。このような認識のもと、我々は、大学生という知的ワーカーの卵を地方都市に集積させる仕組みと中心市街地活性化の問題を繋げたいと考えた。

## ニート対策

地方における若者の問題は人材流出だけでない。ニートと呼ばれている、十分な教育や職業訓練を受けておらず、その結果、職を得ることができない若者も多く存在する。定職に就けなければ、晩婚化及び少子化へも影響を与えるという悪循環になる。我々は、このような社会問題も中心市街地活性化の問題と繋げて解決したいと考えた。

## 2. 社会トレンドおよび地域のニーズ

### (1) 知識社会と創造産業（クリエイティブ・インダストリー）

地域再生を図る際に、「社会トレンド」も重要となる。我々がいかなる時代に生き、その時代がどのような方向に進んでいくのかを見定めることによって、地域の再生方策がより確かなものとなると言える。我々が注目したのは、「知識社会」あるいは「ナレッジ・ソサエティー」という社会トレンドである。

現在は、知識社会、情報社会と言われており、「知識産業」という言葉も注目を集めつつある（たとえば、『知識資本主義』アラン・パートン＝ジョーンズ参照）。アメリカの経営哲学者故ピーター・ドラッカー氏は、これからの最も重要な経営資源は、資本でも、労働力でも、土地でもなく、人々の所有している知識である、と喝破している。世界的に評価の高い一橋大学院教授野中郁次郎氏は「知識創造」が企業の競争力のカギを握っていると論じている。

同様の見解は、地域再生の領域、特に海外の都市再生の領域では、「創造産業」という言葉で議論されつつある。例えば、英国などでは、地域活性化の最も重要な資源は市民の創造力であり、知識創造産業を「創造産業（クリエイティブ・インダストリー）」というキーワードで捉えて、創造産業の集積がタウンセンター（中心市街地）の経済力と活力を向上させると期待を寄せている。日本において創造産業という概念があまり発達しておらず、どの程度の成長産業であるのかというデータを示すことはできないが、英国のデータをまとめると以下ようになる。

- ・ 創造産業は2000年においてGDPの7.9%を占めている。
- ・ 創造産業は、1997年から2000年にかけて年平均9%を遂げている。同期間の経済全体の成長率は2.8%であることを考えると、成長産業であると言える。
- ・ 2001年12月現在、創造産業への雇用は195万人である。
- ・ 創造産業の雇用は、1997年から2000年にかけて年平均9%で成長している。この期間の経済全体の雇用は1.5%の雇用に留まっていることを考えると、雇用から見ても成長産業であると言える。

日本において、創造産業による地域活性化というコンセプトと類似した取り組みとして「SOHO=ソーホー（スモールオフィス・ホームオフィス）による地域活性化」があげられる。一般的に、SOHOとは、「情報機器を使ってビジネスを行う個人業者や零細企業」であり、したがって、「SOHOによる地域活性化」とは、行政によるSOHO支援システムの構築であるといえる。青森大学柴田教授によると、2004年から2005年に全国の区市町村に対して、SOHOによる地域活性化に対する関心を訪ねたところ（全国779区市町村が回答）、約60%の自治体が興味ありと答えているが、8割以上が現

段階では、SOHOが入れるような公的な施設（SOHOインキュベーション施設など）を整備していないと答えている。このことは、創造産業あるいはSOHOに対する全国の区市町村のニーズはかなり高く、彼らに対して提案していく余地は充分あるものと我々は考える。

さらに、東京都千代田区の㈱プラットフォームスクエアでは、単なるSOHO支援に留まらず、「家守（おせっかいな大家さん）」という施設管理者が、知的労働者を結ぶネットワーカーあるいはプロジェクト・インキュベーターとしての役割を果たしている。このような事例は、創造産業を軸としたまちづくりのさらなる発展の可能性を示唆しているものと思われる。

## (2)文理の融合

我々が注目するもう一つのトレンドは「文理の融合」である。1985年のプラザ合意以降、安価な製品の輸入と企業の製造部門、特に電子・電気の加工組立部門は、いっせいにアジア、特に中国に移管しており、我が国の製造業は急速に空洞化していった。このような社会的な変化への対応として、国内製造部門においては、付加価値の低い商品の生産から付加価値の高い商品の生産へ移行させ、地方における製造業の存続を図ろうとしている。高付加価値化の内容としては、高機能化と高デザイン化であるが、我々は、「デザイン化」という社会トレンドに着目した。すなわち、デザインあるいはコンセプトという文系的発想ともものづくりで不可欠な理系的な技術の2つの異なった発想が融合しつつあるという社会トレンドに着目した。

## 3. 我々の提案するコンセプト

ここでは、上記のような基本的な考え方と社会トレンドを踏まえ、我々の提案するコンセプトをまとめるものとする。

### (1)コンセプト

我々が提案するコンセプトは、

**中心市街地の再生**  
～地域発「創造産業（クリエイティブ・インダストリー）」の育成を通じて～

である。

我が国においては、「創造産業」の定義はなされていないが、英国文化・メディア・スポーツ省は以下のように定義している。

創造産業とは個人の創造性、技術、才能をもとに、知的財産の創造・利用を通して、  
富と雇用を増加させることのできるポテンシャルを持った産業である。

この創造産業には、広告、建築、芸術、骨董品市場、クラフト、デザイン、デザイナーズ・ファッション、映画、ビデオ、双方向性レジャーソフトウェア、音楽、演劇、出版、ソフトウェアおよびコンピュータゲーム、テレビ、ラジオなどが含まれている。

地域発とは、地域住民が自律的に活動し、地域資源を積極的に活用するという意味である。

## (2) 地域発創造産業クラスターとしての中心市街地

我々の提案する「地域発創造産業」と中心市街地とはどのような関係にあるのか。我々は、中心市街地を地域発創造産業の集積地、すなわち創造産業のクラスターとして捉えるものとする。その場合、以下の2点が重要となる。

- ・創造階級（クリエイティブ・クラス）の集積場所としての中心市街地
- ・文化資源（クリエイティブ・キャピタル）の再発掘・再評価

すなわち、創造産業クラスターにおいては、創造産業に従事するクリエイティブ・クラス（創造階級）の集積度を高め、地域固有のクリエイティブ・キャピタル（文化資源）を発掘することを目的とする。前提として、地域には地域特有の資源が賦存しているにもかかわらず、それらの資源が埋もれたまま、十分に活用されていないという認識がある。

## (3) 地域発創造産業クラスターの特徴

「地域発創造産業クラスター」の特徴は以下のようにまとめられる。

- ・中心市街地に「創造産業」の集積を図ることによって、自立型地域経済の確立に寄与することを目的とする。
- ・単なる産業集積ではなく、イノベーションを継続的に起こす仕組みを地域の中に埋め込むことによって、地域経済の拡大を図る。
- ・日本のSOHOによる地域活性化の取り組みは入居企業に大きな特徴はないが、地域・創造産業クラスターは、先に定義した成長産業としての創造産業の誘致に重点を置く。特に、芸術（音楽・美術）、ソフトウェアなどのアートあるいはコンテンツ産業といわれる、いわばソフト産業に焦点を当てる。
- ・若者の創造産業への関心は高いと思われるため、若者の中心市街地への集積を図る。
- ・芸術エキシビジョン・イベントを開催することによって賑わいを形成し、地域の中心市街地の活性化に寄与する。
- ・地域で個々に活動している芸術家・アーティストを束ね、情報交換の場を提供すると共に、販路の拡大を支援あるいは助言する。

## 4. 地域発「創造産業」の育成における「産学の連携」

先に述べたように、我々は目的を「中心市街地の再生」と明確にし、「産学の連携」をそれに寄与するものとして位置づけた。ここで、「産」及び「学」との連携内容をまとめるものとする。

### (1) 「産」との連携

「産」との連携内容としては以下のようなものが考えられる。

ソフト化・デザイン化の領域での連携

我が国のものづくりにおいては、ソフト化・デザイン化といった「創造的」な作業を付け加えて、高付加価値化を図ることが不可欠となっている。このような現状から、地域産業界、とくに製造業は我々が提案する創造産業クラスターの持つ「デザイン機能」「ソフト化機能」を活用することができる。

実験的アンテナショップ

地域内には多くの製造業者が集積しているが、市民には実際にどこでどんなものが作られているのか知られていない。そこで、中心市街地に地域企業のためのアンテナショップを開設し、地場企業の商品の販売もしくは陳列を行い、広く市民にPRするとともに、市場調査的な機能も持たせる。

ベンチャーキャピタルの創設

新産業を創出するに際して、地域産業が貢献できることのひとつに資金の貸し付けがあげられる。地域発創造産業の育成に対しても、ベンチャー企業への金銭的な支援が望まれる。

## (2)「学」との連携

「学」との連携内容としては以下のようなものが考えられる。

デザイン力の提供

繰り返し述べているように、デザインは創造産業における最も重要な要素のひとつである。そこで、芸術系大学には、デザイン力を提供するような機能を期待したい。

地域資源の解説

先に述べたように、地域には地域住民にさえ知られていない貴重な地域資源が眠っている。歴史学、地理学を中心とした大学の人文科学系機能を地域資源の発掘・解説のために活用する。

経営指導

創造産業はアイデアが先行しがちであるが、経営感覚も非常に重要な要素である。そこで、ビジネスプランの指導などを大学の経済・経営学系の先生に担って頂く。

## 5. 具体的なプロジェクト

上記のような「地域発創造産業クラスター」を創造するために必要と思われる具体的なプロジェクトをまとめると以下ようになる。

### (1)日本版CIDAの創設

中心市街地において、地域発創造産業クラスターを形成するに当たっては、創造産業の育成のた

めの核となる組織が必要となる。我々はそのような組織として日本版CIDA (Creative Industry Development Agency) の創設を提案する。英国北部ハダースフィールド町は、創造都市 (Creative City) という概念を使って地域振興を図っているが、そのなかの中核的な組織のひとつとなっているのがCIDAである。我々は、中心市街地の空き店舗のひとつにCIDAのような組織を立ち上げ、地域発の「創造産業クラスター」形成の中核的な役割を担わせる。

具体的な整備機能に関しては、各地域によって異なるものと思われるが、例えば、創造企業にオフィスを提供し、コピー機、会議室など、施設の共同利用が可能な不動産事業などが考えられる。また、地域の芸術家のための展示会、講演会の開催、作品販売のアドバイス、個々独立して行っている芸術家の情報交換の場の提供などを行うことによって、中心市街地に賑わい形成するための芸術的な雰囲気づくりに努める。さらに、創造産業の分野において、産学連携のコーディネーター役を果たすような機能を加える。

## (2) デザインセンターの創設

知識社会は、機能だけでなくデザインを重視する社会であり、デザインは創造性と深い関係がある。このような観点から、デザインによって商品に価値を付加することを主要業務としたデザインセンターを創設する。

## (3) インキュベーションセンターの整備

基本的には、アイデア創造のためのオフィス空間を提供する。加えて、オフィスを構える個人に対して、助言アドバイスを与える機能を持たせる。例えば、企業からスピンアウトした人や退職後の団塊世代が第2の人生として起業化することを助ける。

## (4) ビジネス・ジェネレーター及びチャレンジショップの開設

アイデアはあるが、ビジネス経験の少ない大学卒業後の若者あるいは主婦など、コミュニティビジネスのような事業を起こしたい人・グループに対して、パソコンの使い方や基本的なビジネスノウハウなど、事業の初期段階から指導できるような機能を持たせる。すなわち、ビジネス・インキュベーターの準備段階に位置するものとする。また、退職団塊世代を助言者として迎え入れる。さらに、チャレンジショップでの具体的な販売ができるようなシステムも構築する。

## (5) インターンシップ環境の整備 (趣旨の広報と協力会社等の発掘)

大学生や卒業生で起業を志している若者を対象に、ベンチャー企業等でのインターンシップを通して実際のビジネス経験を積ませて、ビジネスノウハウ等の習得と実践力・実行力を身に付けられるシステムを、企業・若手経営者等の協力のもと構築する。その過程では、できるだけ仕事を任せ責任を持たせてスムーズな起業に資するようにする。同時に、ニートに対しても、インターンシップが実施できるような環境を整備し、創造産業において就業経験が可能となるようなシステムを構築する。

## 6. シンクタンクの役割

地域発創造産業クラスターに関連したシンクタンクの役割をまとめると以下のようになる。

### (1) 政策・事業・システムの提案

地方シンクタンクは、地域情報の集積地であり、地域全体を見渡せる地位にある。そのようなアドヴァンテージを利用し、これまで地域振興に寄与するような政策・事業・システムの提言を行ってきた。今後は、このような機能をさらに強めていく。中心市街地の活性化手法としての「創造産業」の創出という提案もそのような役割を担うものである。

### (2) 産学連携の検証

シンクタンクは、まちづくりにおけるアクターとしてだけでなく、分析者としての役割を担う必要もある。すなわち、科学的あるいは客観的な視点を持って、地域振興策を分析あるいは診断することが求められる。産学連携においても、実際の活動を常に検証し、課題を抽出し、効果を向上させるための処方箋を提供することも重要な役割である。地域発創造産業の育成に当たっても、産学連携の効果を検証しつづけるという役割を担うべきである。

### (3) 場の設定とコーディネート機能

地域発の創造産業を創造し、育成していくに当たっては、多くの分野の人々の協力を必要とする。そこで、産、官、学、様々な分野の人々が同じテーブルにつき、共通の認識を持ってもらう必要がある。そこで、シンクタンクは、このような「場」を設定し、これらの異分野の人々をコーディネートする役割を担う必要がある。

### (4) ネットワークの提供とベンチャーキャピタルシステムの構築

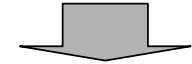
起業を志す若者に不足している各種情報や人的ネットワークの提供、必要に応じて法務・財務の専門家や企業紹介等を行なう。また、投資を呼び込むため、投資家や経営者等を対象に定期的な企業紹介セミナー等を実施し、起業家同士のネットワークの構築と、ベンチャー企業に対する投資機会を地域に提供するとともに、起業資金の確保のための支援を行う。

### (5) マーケティング

消費者ニーズは変化しやすいため、常に市場の動向を注視する必要がある。そこで、シンクタンクがマーケティング機能を担うことも考えられる。地域消費者の興味や関心が今どこにあるのか、前述したアンテナショップで得られた実績を客観的かつ中・長期的に分析し、その結果を定期的にフィードバックしていくこともその一つである。

上記のような役割はシンクタンクにとってビジネスチャンスの創出・拡大につながるものであり、こうした分野でシンクタンクが果たし得る役割は大きいと考える。

テーマ：産学連携と地域再生 ～シンクタンクの役割～



基本的な考え方

- ・産学連携ありきではなく地域再生ありき
- ・地域再生のテーマは「中心市街地」

その他の狙い

- ・情報発信力の強化
- ・地元大学卒業生の定着
- ・ニート対策

社会トレンド

- ・ナレッジ・ソサイエティ
- ・文理融合



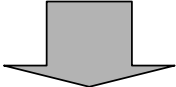
提案するコンセプト

**中心市街地の再生**  
～地域発「創造産業」の育成を通じて～

地域発創造産業クラスターとしての中心市街地

- ・創造階級の集積場所としての中心市街地
- ・文化資源の再発掘・再評価

地域発創造産業クラスターの特徴



「産」の連携

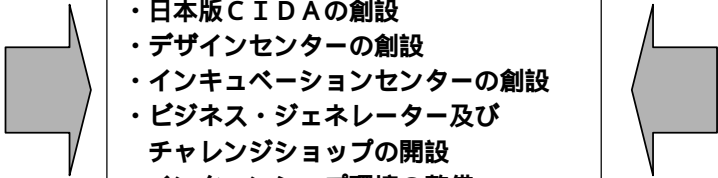
- ・モノづくりの高付加価値化（ソフト化・デザイン化）
- ・実験的アンテナショップの提供
- ・ベンチャーキャピタルの創出

展開すべき具体的な事業

- ・日本版CIDAの創設
- ・デザインセンターの創設
- ・インキュベーションセンターの創設
- ・ビジネス・ジェネレーター及びチャレンジショップの開設
- ・インターンシップ環境の整備

「学」の連携

- ・デザイン力の提供（芸術系大学）
- ・地域資源の解説（人文系大学）
- ・経営指導（経済・経営系大学）



シンクタンクの役割

- ・政策・事業・システムの提案
  - ・産学連携の検証
  - ・場の設定
  - ・コーディネート機能
  - ・ネットワークの提供
  - ・ベンチャーキャピタルシステムの構築
  - ・マーケティング
- ↓
- ・ビジネスチャンスの創出

地方シンクタンクの役割

# 「産学連携と地域再生 ～シンクタンクの役割～」

- 地域密着型産業である第一次産業を事例に -

財団法人えひめ地域政策研究センター	武智 公博
総合研究開発機構	大島 礼
株式会社地域計画建築研究所	尾澤 律子
株式会社百五経済研究所	梶本健太郎
財団法人山梨総合研究所	中野 一成

( グループリーダー )

## 1. 産学連携と地域再生

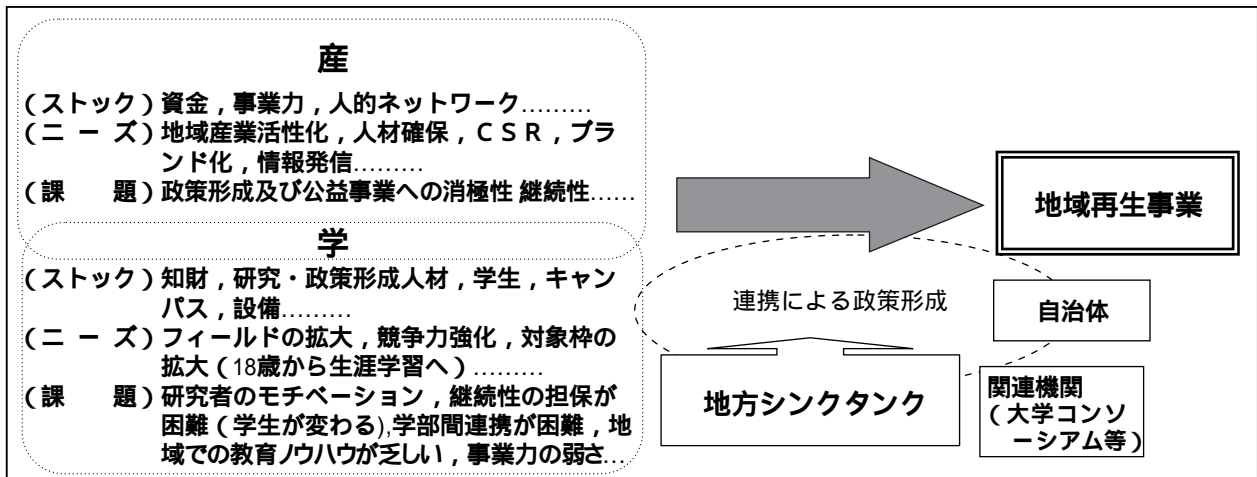
一般に、産学連携と言えば、大学等の高等教育機関が有する技術・知財シーズの企業への移転を思い浮かべることが多いが、こうした理科系シーズに基づく産学連携を想定した場合、産学連携を地域再生に結びつけるための視点をうまく捉えることができない。というのも、特に工業製品に関連する技術シーズは基本的に地域性にとらわれないことが多く、連携の当事者である高等教育機関と企業がまったく別の場所にあっても問題がないケースが大半である



ことから、連携の成果が地域に還元されるとは限らないからである。もちろん、産学連携の結果、企業が発展すれば、その地域での雇用が増加し、地域が活性化する一面もある。また、大学にも注目が集まり、他の地域から多くの大学生を集めることができ、地域再生や地域活性化に結びつくかもしれない。ただそこでの地域再生は、いわば間接的であり産学発展に伴って牽引された再生である。企業や大学がその技術・知財を有したまま別の地域に移転してしまえば、元に戻ってしまう代物である。

今回のテーマである地域再生において、地域の人材・知識が集積する大学等の高等教育機関との連携は非常に重要な要素である。地域再生本部が決定した「地域の知の拠点再生プログラム」でも、高等教育機関は地域再生の重要な担い手として位置づけられている。また、高等教育機関においても、取り巻く環境や社会ニーズの変動により、大学のあり方やその戦略を大きく変化させてきており、地域貢献は重要なテーマのひとつとなりつつある。実際、地域を研究フィールドとして捉え、商店街の活性化に大学が取り組むような事例も各地で見られるようになってきている。このように、地域再生の視点から、高等教育機関や産業組織を地域資源としてとらえ、それぞれが保有する資源を活用した展開を図ることが、地域の特性を踏まえた地域再生のひとつのあり方と考えられる。

それでは、大学や産業組織を地域資源としてとらえた場合、その活用できる資源にはどのようなものがあるだろうか。それを検討するには、理系中心の産学連携だけではなく、社会文化系・芸術系の産学連携はもちろん、インターンシップや地域の取組みに参加する学生パワーや大学のキャンパス施設（研究室・教室・広場等）の活用も包含して考えるべきである。（図表1）



【図表 1】産学の資源を活用した地域再生の展開イメージ

概括すると、今までの理系中心のいわゆる技術シーズの移転を狭義の産学連携と捉えるならば、大学や企業を地域資源ととらえた産学連携は広義の産学連携と言える。ここでは産学連携を広義に捉え、いかに地域再生に結びつけるかについて検討してみたい。

## 2. 地域再生に結びつく産学連携のあり方

産学連携とは、行動原理が異なる2者を連携させる試みである。「学」はその本質である教育に多くの労力をつぎ込む必要があり、「産」が望む研究にのみ専念することは困難である。一方、「産」は利潤追求、市場価値に深く係わっており、将来的にわたって利益を生み出さない活動や、企業の市場価値を損なうような事業には関与し難い。この方向性の違う2者を連携させ、さらにその成果を地域再生につなげていくことは容易ではない。

産学連携には様々なパターンが考えられるが、地域再生に結びつく産学連携のあり方を検討する場合に最もイメージしやすく、また産業活性化の効果が地域再生に直接的に現れる産業は、地域密着型産業である第一次産業であろう。そこで2班としては、第一次産業を事例に取り上げ、広義の産学連携のあり方を検討することとした。

### 農畜産物の高付加価値化

最近の第一次産業を取り巻く課題として、後継者不足が挙げられる。また、関連して耕作放棄地が増加している。耕作放棄地は都道府県レベルで見ても、例えば長崎県で15%を超えており(2005年農業センサス)、今後、第一次産業従事者の高齢化が進むとともに、後継者不足と耕作放棄地の問題が急速に進展する可能性がある。

この問題は、様々な社会的、経済的要因に起因するものであるが、原因のひとつに第一次産業では十分な収益を得られないという現状がある。商品の価格決定はマーケットにゆだねられ、生産者のなかにはつくれるほど赤字になるという状況に追い込まれる者さえいる。こうした事態を何とかしようと、産地では農畜産物の高付加価値化やブランド化のための取り組みが行なわれているが、これらの分野での産学連携の可能性はどうだろうか。

地域再生を実現する手法として、地域発の新たな高付加価値商品の開発や、それとリンクした地域イメージの醸成が考えられる。その地域イメージを定着させることで住民が自認する地域アイデンティティーと顧客が求める地域イメージが一致することになり、交流人口の増大や地域経済の活性化に繋がっていくのである。

高付加価値商品の開発にあっては、新品種・新製品や加工方法の開発で大学等の知見が活用できる余地は大きい。また、マーケティングやデザインの面で専門的な支援が得られれば、生産者にとって大きな力となると考えられる。

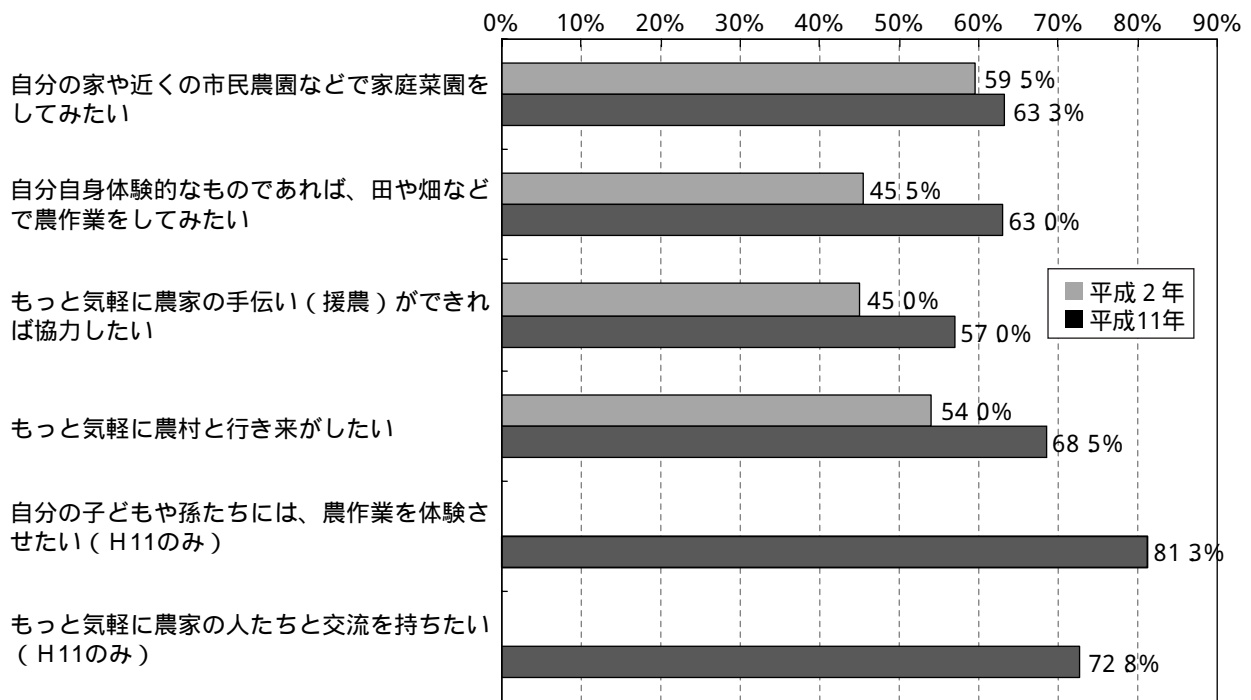
現在、生産する側が販売ルートにまで入り込み、生産者と消費者の「共生」を図る試みが始められている。実際に生産の現場を見ることにより、新規就農を希望する人々も出始めている。こうした「農」と「消費者」をつなげるツアープログラムの整備など、交流の基盤を整備するためのツール整備も「学」に期待される。例としては、体験農園によるグリーンツーリズムの展開も可能であることが挙げられよう。また、こうしたツアーによって消費者が生産者と直接対話することにより、商品の需要と供給がかみ合うことも効果として挙げられる。農畜産業において一番大切なのは計画性である。交流で意見交換することによって、どの農畜産物の何の品種、どのような加工製品が求められているのかも分かり、計画的に経営できるようになる。要望を聞けば、新しい品種や加工製品づくりに取り組むこともできる。こうした場面で消費者のニーズにあった新品種の開発などを大学固有の技術や知的財産を活用して行なっていくことも必要である。

こうした体験就農などによって培われた「知縁ネットワーク」を活用することにより、地域の生産物が全国へと広がり、地域イメージの定着にも一役買うことができるのではないかと。地域イメージを定着させることで住民が自認する地域アイデンティティーと顧客が求める地域イメージが一致することになり、おのずと生産される農畜産物へ高い付加価値を付していくこととなる。

## グリーンツーリズム

農畜産物の付加価値を向上させるツールの一つとして、産学連携を踏まえた都市農村交流のプログラム提供、いわゆるグリーンツーリズムと「学」との係わりについて取り上げてみたい。

グリーンツーリズムのルーツはヨーロッパにあり、ドイツでは100年以上前から農村滞在型休暇として親しまれていたことや、フランスでは18世紀の貴族の間で農村生活を楽しんでいたことなどがその基礎にある。農林水産省グリーンツーリズム研究会によると、グリーンツーリズムとは、「農山漁村地域を訪れる人たちが、その自然、文化、人々との交流やふれあいを楽しむ余暇活動」とであると定義付けられている。近年、日本においてもこうした農山漁村での体験学習的な余暇活動が注目され（図表2）、各自治体ともにグリーンツーリズムへの取組みが盛んに行なわれている。



資料：(株)博報堂生活総合研究所「食と農業に関する意識調査」 首都圏居住の非農業者400名を対象

【図表2】都市住民の農業体験・農村交流等に対する意識

しかしながら、こうしたグリーンツーリズムを地域再生へつなげていくためには、全国に多々ある農山漁村といわれる地域の中で選択されるだけの独自性・特殊性を確保していかなければならない。また、グリーンツーリズム自体、あくまでも余暇活動の選択肢の一つに過ぎないため、持続可能なものとして位置づけていかなければ、地域再生へつなげていくことは難しい。

こうした観点から、グリーンツーリズムに、「学」の視点と協力を加えることで、地域再生へのさらに進んだ取組みに広げることができるのではないかと考える。

具体的には、まず、その地域の強み、弱みなどを把握するマーケティング戦略を行ない、ツーリズムを行なう上での「コンセプトの明確化」を図る試みが重要である。その上で、訪れた人々がその地域の文化や歴史への見識を深めるための講座（地域文化学講座、地域歴史学講座）や、農学講座を開催する。「学」の視点を活かしたコンセプトに沿って各種の講座を体験プログラムに活かすことで、ツアーを充実させ、他地域との差別化を図ることが可能となる。

また、グリーンツーリズムで訪れた消費者のニーズをうかがい、そのニーズに沿ったプログラムや農畜産物の新品種、加工品等を開発して提供し、その情報を積極的に発信していく部分においても大きな貢献ができる。他にも芸術系学部で様々なデザインを提供するなど、あらゆる分野で大学の有する「知の活用」が考えられる。

さらに、これらをより効果的なものとするため、広域的な大学コンソーシアムのようなネットワークを形成し、他大学の農学部生を中心とした学生が積極的に実施運営に参加・サポートする仕組みづくりをしていく「マンパワーの活用」も重要である。多くの学生が参加することにより、人材の乏しい農山漁村地域においてのマンパワーとしての補完を果たすだけでなく、若者がもつ活気や賑わいに訪問者が共感し、協働意識を高めるといった効果も期待できる。また、こうした

参加者の協働意識の向上は、余暇活動の一環として行なっていた「援農」から、地域とともに生活し、行動していく「就農」へとステージを引き上げて行く原動力ともなりうる。あるいは、都市部の学生を対象としたグリーンツーリズムを実施することも可能である。都市部の学生の視点を加えることで、より魅力ある商品（あるいは、地域そのもの）を生み出す可能性が考えられる。

また、大学側に対しても、自然環境に調和した新しい食料生産技術開発などの研究に役立つ素晴らしい教材に恵まれることとなるほか、身近な地域環境問題の発見につながり、問題意識を持って活動することのできる将来的な人材育成やコーディネーターの育成に繋がるといった利点もある。

上記のような取組みを実施するためには、研究者や学生の自主的な参加に加え、大学としての積極的な関与と支援が重要であり、参加した者に対する評価方法や参加するための金銭的支援についても入念に検討していかなければならない。

また、「学」という視点で捉えると、こうしたグリーンツーリズムに対する取組みは、大学だけに限る必要はない。2005年度より、新しい高等学校の科目として「グリーンライフ」が導入されたのである。この教科は都市住民の余暇活動のあり方として、農村における文化・伝統・栽培活動などを体験するいわゆるグリーンツーリズムの展開方法を学ぶとともに、都市住民との交流方法について学習する教科である。これは、大学において最近取り上げられるようになった、いわゆる余暇教育学の一つであると考えて良い。また、この教科は選択科目であるにも関わらず、全国の約半数の農業高等学校で導入されたほか、普通科の授業においても導入の例を見ることができるよう注目されている。

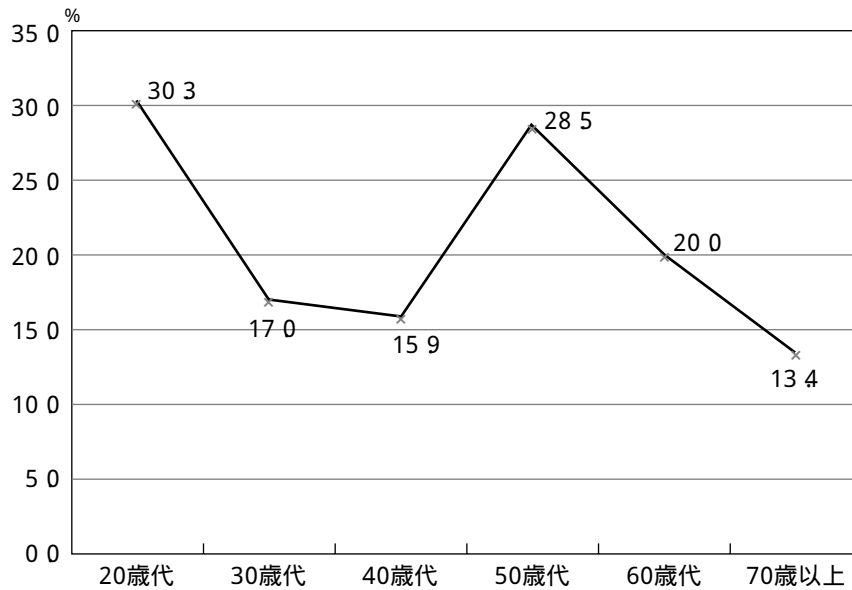
こうした高等学校教育の段階において余暇教育学が始まったことは、今回考えている産学連携の形において「学」側に関わる人材のボトムアップを図る上で非常に有意義であり、グリーンツーリズムに関わるプロフェッショナルを育成していく面でも非常に大きな期待感を持てる。

このように、大学だけではなく、高等学校までを含めた人材が地域の農業と連携することにより、地域イメージの定着（グリーンツーリズムコンセプトの明確化）が図られることとなる。これに加え、各学校のネットワークを活用した情報発信も活発化されることにより、交流人口の増大や地域経済の活性化、農畜産物・加工品の高付加価値化に繋がっていくことが期待される。

また、学生自身が地域に入り込むことにより、さまざまな地域課題に直面し、それらを解決していく方法などを地域住民と共に学びとることができる。そして、これらを継続的に続けていくことにより、新たなソーシャルキャピタルの創造がなされていくことになるのである。このソーシャルキャピタルの醸成こそが地域再生のための必要条件であり、持続可能な地域活動、ひいては新たなビジネスを生み出す基盤となりうるものなのである。

## 地域コミュニティの復興

1947年から1949年生まれの団塊の世代は、2007年から退職時期を迎えるが、意識調査を見ると、地方への移住や交流の希望が比較的高いと見込まれている。（図表3）



(備考) 内閣府政府広報室作成  
「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」(平成17年11月調査)による。  
定住の願望は「都市地域」に居住しているとする者975人に聞いたもの。

【図表3】農山漁村への定住願望に関する意識(年代別男女計)

団塊の世代は、知的好奇心が旺盛で新しいことにチャレンジする意欲が高いといわれている。農山漁村に定住し、第一次産業の担い手として活躍できるよう、地域の受け皿を整えることは地域再生のための有効な手法と考えられる。移住者にとって魅力ある地域づくりのために、高等教育機関が様々な社会人向け講座をいっそう充実させるなど、地域の人材確保のための施策の展開が期待される。

また、若い世代の後継者が第一次産業に魅力を感じられるよう、農業の法人化なども進める必要がある。法人化のメリットとして、後継者となる血縁者がいなくても、社員に若手を採用しておけばこの職業を持続させられることが挙げられる。また、法人化することにより、技術の伝達も容易にできるようになる。特に、農業経営を行うために農地を取得できる農業生産法人においては、耕作放棄地が増加する現在にあって、ステージ(農地)には困らないという利点がある。このほか、産学連携の受け皿としても、個人経営的な「農」よりも、「法人」格を有する団体であれば大きな効果を期待できる。

他にも、関心が高まる環境問題に対応できるよう、バイオマスを有効に活用しエネルギーの地産地消を図り循環型地域社会の構築を進めることで、魅力ある生活エリアとしての農村の復興が実現される可能性がある。こうした分野では、大学等の最新の研究成果がフィールドテストの形で活かされフィードバックされていき、地域コミュニティの復興と結びつく好循環の関係が期待されよう。



### 3. シンクタンクの果たす役割

前述の農畜産物の高付加価値化の取組み、グリーンツーリズム、地域コミュニティの復興といった事例では、いずれも地域資源の高付加価値化に大学の知を活用している。しかも、このように地域資源を活用し、新たな商品や事業を創出する地域イノベーションの活性化を図るには、地域が主体となって取り組む仕組みづくりが必要であることが示唆されており、この地域の仕組みづくりに地方シンクタンクの機能が発揮されると考えられる。

地域を舞台とした産学連携は、官との連携や地元組織との連携も必要であり、行動原理が異なる産と学だけでなく、地域の昔からの地縁的ネットワーク、大学等の目的を持った組織、地域外のネットワークといった多様な機関や人との関連性も不可避となる。そこで、シンクタンクの役割に焦点を当てると、まず連携のためのコーディネート役が大きな役割として考えられるが、それだけでなく、本提案では次のとおり地域の取組みを活性化するための一連の展開をサポートする総合力が問われていると考える。

#### シンクタンク機能

まず、シンクタンクが有する分析力と地域情報や人的ネットワークの集積を活用し、客観性、中立性、服眼性を持って、地域資源や地域の抱える課題整理及び地域分析を行い、地域再生の方策と提案することである。

もう一点は、この産学官地の連携による取組みを通じて、地域の政策提案を図っていくことである。それは大学の学術研究に基づいた政策提案と異なり、乱暴な言い方をすると時代を読み、斬新なアイデアに基づいた政策を提案し、地域にイノベーションを起していく政策アントレプレナーとしての役割を担うことが期待される。

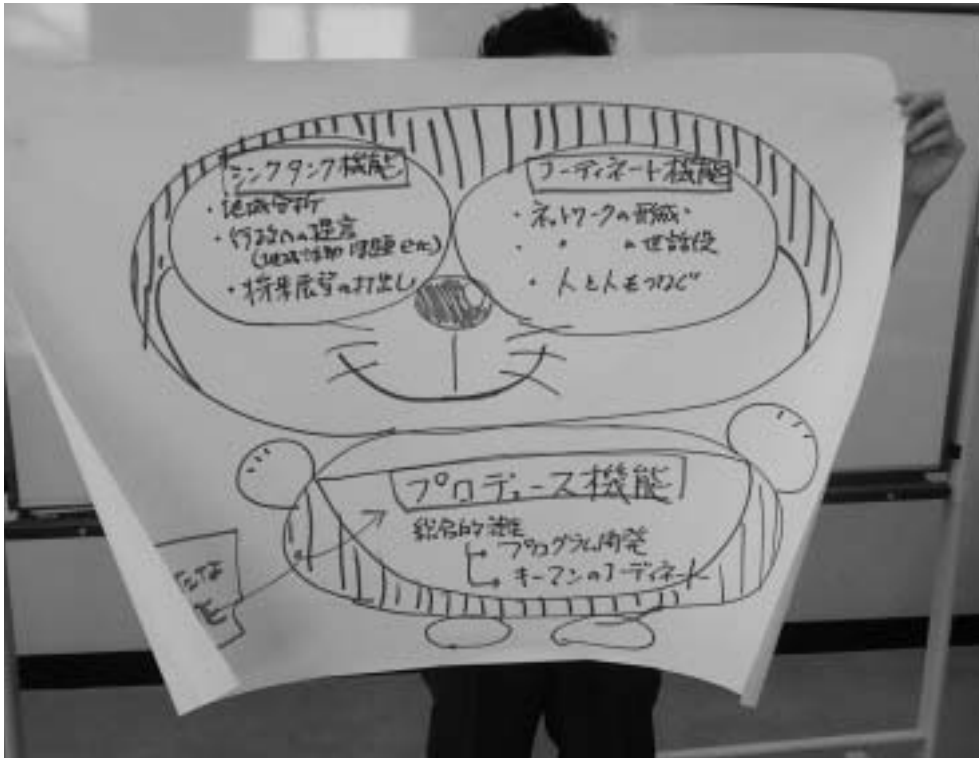
#### コーディネート機能

次に、地域再生の方策を具現化するために、大学の知を活用していくためのコーディネート機能として、地域再生への取り組みへ適切な研究者の参画を図り、地域のコアとなるネットワークの形成を図っていく。

#### プロデュース機能

3点目はシンクタンクの役割としてこれから重要になってくると思われるプロデュース機能である。地域の課題を整理し、地域資源を活用した地域再生の方策を提案するだけでなく、公平性の担保が問われる行政とは異なり、戦略的に取組める実行力を活用し、地域再生のプロジェクトを発案、具現化に向けた仕掛けづくりや、事例に見られた都市居住者を対象とした農畜産品のマーケットリサーチの取組みとグリーンツーリズムの取組みを連携させ相乗効果を発揮させるようなプログラムの開発、また複数のキーマンの効果的連携等への仕掛けといった、総合的視点にたち、地域再生プロジェクトのプロデュースをしていくことが期待される。

上記のとおり、3つの機能を持ち広視野から地域マネジメントの立役者として地域に働きかけることを、地方シンクタンクの役割として提案したい。(図表4)



とはいえ、地域における人的ネットワークは一朝一夕に形成できるものではなく、提言の実現は容易ではない。しかし、今回の研修会で発表していただいた、知多半島総合研究所のように、我々の提言を既実践し具体的に展開している取組み事例もあり、こうした先進事例を参考に各地域の実情にあわせた取組みが拡大することを願うものである。

## 地域再生のための産学連携 ~シンクタンクの役割~

株式会社九州テクノリサーチ	池隅 達也
財団法人静岡総合研究機構	米田 徳広
財団法人とくしま地域政策研究所	吉原 典子
財団法人関西情報・産業活性化センター	布施 匡章
シンクタンクふくしま	奥山 紳
	( グループリーダー )

### 1. 研修参加前のプレ討論要約

- ・産学連携で生み出す研究・ビジネスにシンクタンクが関与するとどのような違いが出せるか。また、提案機能をもつ他の業種に対して、シンクタンクが打ち出せる違いとは。(池隅)
- ・産学連携において、中小企業側が連携のメリットを把握できていないのでは。(米田)
- ・地域資源の掘り起こし、課題整理の具体策が知りたい。(吉原)
- ・地域再生に繋がる産学連携における活動を企画・運営するネットワークにおいて、シンクタンクはどう関われるのか。(布施)
- ・目的達成には産・学ともにある程度の汗をかくことが必要だが、どのような動機付けと周辺のサポートが成功へと導いていけるのか。(奥山)

### 2. グループ討議内容

#### 起

目標.....地域再生

そのために産学連携を考えたい。

シンクタンクのできることは何か。



#### 〔シンクタンクが現在有している機能・経験とは〕

- 1 産業活性化・観光振興などのテーマについて、問題分析の経験。
- 2 自然・農産物・人材・企業などの地域資源において、情報の蓄積。
- 3 補助金・助成金(学術研究助成)などの活用による資金調達案内。
- 4 地域全体を見渡した地元への利益誘導の考え方。
- 5 マーケティングリサーチ機能。
- 6 行政との接触における案内役。

これらの機能・経験から、地域再生のためにシンクタンクができる事を想定していくこととする。

## 承

### 具体的検討事例……「阿波番茶まんじゅう」

各研究員が持ち寄った産学連携の事例の中から具体的に検討する案件として、徳島の菓子メーカーと四国大学の共同開発による「阿波番茶まんじゅう」を選択。

### 〔阿波番茶まんじゅうを地域再生につなげるためにすべきこと〕

#### 1 付加価値の創出

このまんじゅうに使用している「阿波番茶」は後発酵茶で体に良いとされており、弘法大師が伝えたともいわれている。そこで、お遍路文化と併せて「体の健康と心の癒し」というテーマ付けをして付加価値をつける。

お遍路……弘法大師信仰に基づいた四国八十八ヶ所を巡る旅。遍路道には豊かな自然やお接待文化があり、最近では「癒し」や「自分探し」を目的とした歩き遍路も増えている。

#### 2 阿波番茶健康ブランドの作成

まんじゅうに限らず、徳島の地域資源の中から阿波番茶とマッチングできる素材を検討し、徳島の統一ブランドをつくる。

#### 3 各関係機関との連携による地場産業の活性化

大学（阿波番茶の成分分析）や行政（販路拡大のためのPR策）、マスメディアとの連携により、乳酸菌発酵という独特の製法である阿波番茶の知名度をあげ、地場産業の活性化を図る。

## 転

### 産学連携と地域再生の問題点

#### 1 「産」の性格と「学」の性格との相違

企業の目的は利潤最大化であり、新商品の開発や新ブランドの創造が地域振興に繋がることは望ましいと考えるが、地域再生ありきの生産ではない。

また、大学の目的は研究と教育であり、研究成果の発表と、それが有用であるというアピールの場として産学連携は位置づけられるが、地域への還元が主目的ではない。

#### 2 連携の成果と地域再生とのミスマッチ

上記のように、企業と大学ではそもそもその目的が異なっており、そこから生まれる産学連携の成果と地域再生の目的との間にはミスマッチが生じる可能性がある。そのミスマッチを解消するために、シンクタンクの役割が生まれると考える。

### 3 地域再生のための産学連携のあり方

地域再生に繋がる、望ましい産学連携の形とは、企業と大学双方が地域再生を通じてモノを作り、また、地域振興からフィードバックを得られるような形態であると考え。フィードバックを行うことがシンクタンクの役割の1つとなり、その内容は、産学連携から生まれた商品の評判や売れ行き・改善点といったデータや、今後に繋がる情報の提供ではないか。

一度限りの産学連携による開発ではなく、「持続可能な再生」の追及こそが、これからの地域再生に求められる要素である。

## 結

目標.....これからの地方シンクタンクのあり方

### 〔これからのシンクタンクの取り組み〕

#### 1 過去の調査等の整理・加工

過去の調査の情報蓄積は、使用しやすい形態に加工するなど、今後の地域再生の事業へ活用することを含めた調査の蓄積を進めていく。

#### 2 マーケティング

調査蓄積や成果を社会的に還元していくという観点に基づく市場性調査により、地域再生に有効になる事業、根拠を合わせて提案できる力を向上させていく。

#### 3 推進体制づくり（大学、行政、NPO、JA、自治会、商店街）

地域再生の事業には、数、質ともに多様なパートナーが必要になると考えられるので、普段から地域の集まりに参加するなど、いざというときに連携できる体制づくりを継続して行う。

#### 4 行政へのアプローチとして（テーマ方向付け、必要なデータ提供、つなぎ役としての役割）

行政としての業務を知り、互いに顔を知っていることなどの利点を生かし、行政が参画する事業で、行政側との連携や、行政側が受け入れやすい提案の作成など、提案、人的交流を含めた連携を図る。

#### 5 大学との連携（歴史的解釈、学術的証明等）

転の項で紹介した事例における、PR内容の歴史的根拠づけの提案や、科学的研究成果を事業へ生かすための提案などには研究知見が生かされると考えられる。地域再生と研究成果の双方を知る立場を生かした取り組みを行う一方で、「転」の項で指摘されたミスマッチの解消にも配慮し、研究資産と地域再生の橋渡しとしての機能を高めていく。

#### 6 シンクタンクのイメージアップ

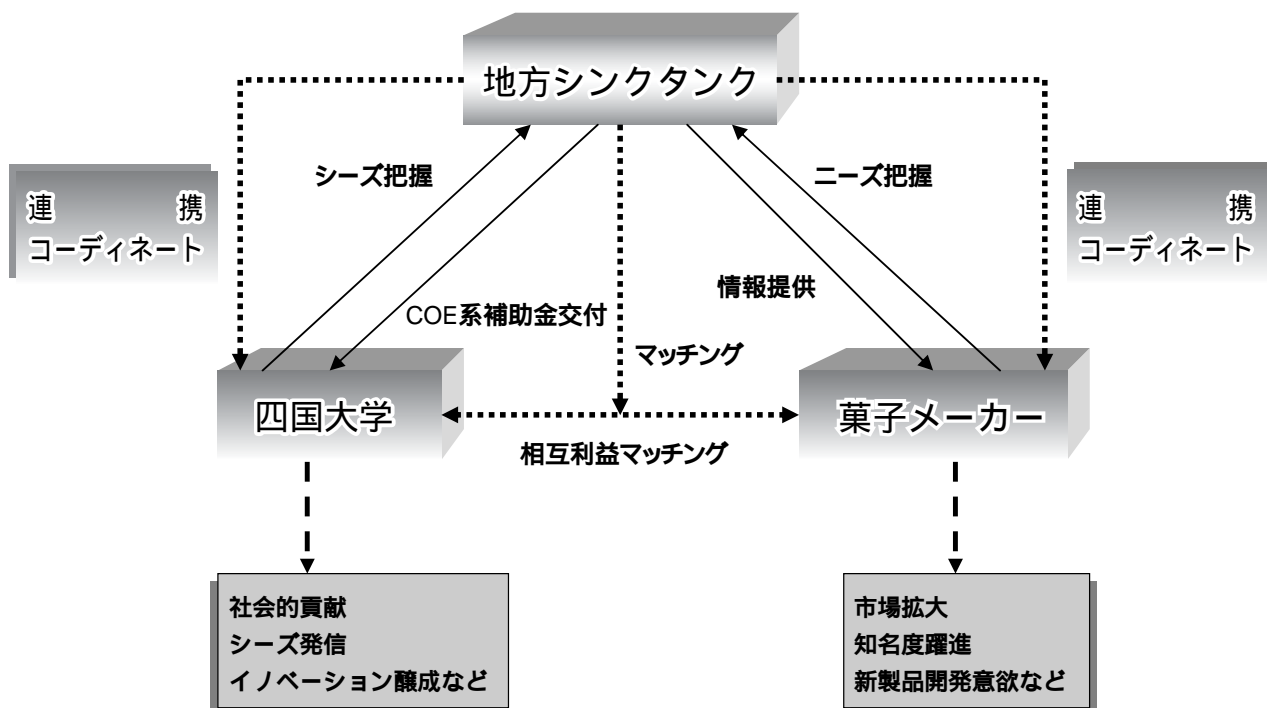
シンクタンクとして地域再生の事業に参画することに支障がないように、実績を積むことに加え、調査業務を行うときと違うロゴ、ブランド名を使った活動を進めるなど、地域再生に向けたシンクタンクのイメージづくりを進めていく。

## 討議の感想

中央シンクタンクと地方シンクタンクとの相違点は第一に地域事情への精通、第二に地域資源の把握、第三に地域ニーズの把握、第四に地域情報発信によるアイデンティティーの確保など様々なファクターを持ち合わせていると考えられる。産学連携においては、グループ討議でも成されたシンクタンクとしての役割はこのような要素を活用することにより、より現実的なものとなると思われる。

私たちグループでは現実的に徳島「阿波番茶まんじゅう」が産学連携により開発された事例について、シンクタンクがどのような関わりにより、番茶まんじゅうを全国的に有名なお遍路さんを通し、また番茶効能とリンクをさせた健康的なお菓子と銘打って徳島はもとより四国及び関西、中国地方、将来的には全国に発信できるかの討議を行った。

本事例にシンクタンクが関わった場合のイメージ



最後に今後数年間の単位で、マクロ的に産学連携がより一層盛んとなると思われることから、シンクタンクはその芽を増やし、大輪が咲く一助を担うことから、いずれ地域の発展、再生、活性化に結びつくこととなるだろう。

## 「日本福祉大学の地域連携 - 地域再生の視点から - 」

日本福祉大学知多半島総合研究所  
所長代理 山本 勝子 氏



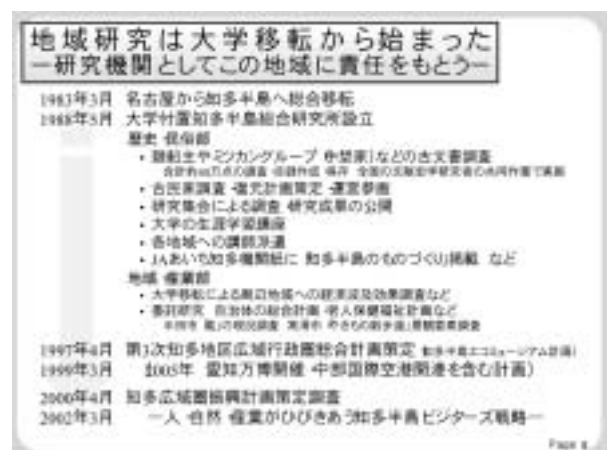
日本福祉大学が、名古屋から知多半島に移転して24年目になります。「地域」というものを非常に強く意識したのは大学移転がきっかけです。移転当初、全く新しい地域で、大学としてどうやっていくのかという課題がありました。当時、私は研究課というところにおりまして、研究機関としてこの地で調査し、実証し、実験したことを全国に発信していける研究所をつくりたいという想いから「知多半島総合研究所」を設立し、今年で19年目になります。

知多半島総合研究所は、歴史・民俗部と地域産業部の2部からなり、歴史の調査、現状分析の二本柱でやってまいりましたけれど、その蓄積・実態はこの地域の宝に、財産になりつつあるのではないかという気がしています。

### < 地域研究は大学移転から始まった >

ネットワークづくりや地域連携は、ただ、やろうと思ってすぐにできることではありません。長い時間をかけて、地域のなかで、どういう信頼を生んでいくかということがあるわけです。大学総体として、いろいろやってくれる、頑張ってくれるという評価も得ないといけない。研究成果をできるだけ、地域に見えるように返していくこともしなければなりません。特に歴史・民俗部での研究は非常に取り組みやすかった。

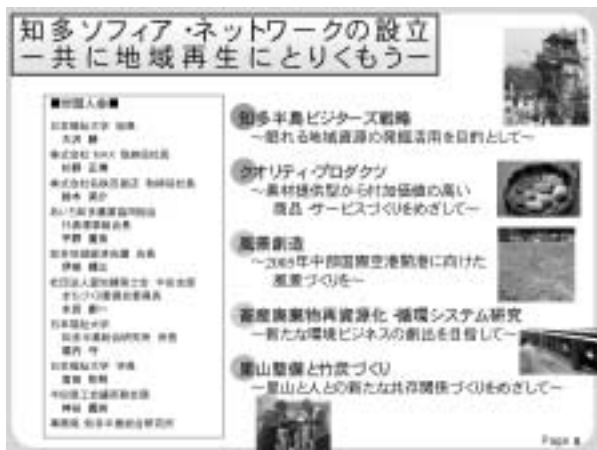
自分たちが住んでいるところが、どういうところなのかということ、少し長い歴史的スパンの中で位置づけて、評価をする、証明するということは地域の方にとっては、一番嬉しい情報です。また、地域・産業部では、各種委託を行政からうけて、こんな小さな地域でも、課題や考え方の違い、仕事のまわしかたの違いがあり、それぞれの地域にある問題の発見ということにおいて、委託の仕事は本当に勉強になったと思います。



### < 知多ソフィア・ネットワークの設立 >

97年に知多地区広域行政圏の総合計画策定の委託をいただきましたが、仕事をすすめるなかで、一体これは誰が計画を実施するのだろうか、行政だけでやれるわけがないということが、自分たちが書いていて分かるわけです。このまま

にしておいたら、折角2年かけて、計画してきたことが柵の中に入っておしまいになるという状況にありました。そういう状況の中で、99年の10月に「知多ソフィア・ネットワーク」を立ち上げることになりました。立ち上げるときにどういう地域振興の課題を提案していくかということがありますが、そのいくつかは知多地区広域行政圏の総合計画で策定したもののなかから、広域的に民間と一緒にやりましょうという提案・計画できました。計画をつくるというのは、地域のなかでは、シンクタンクか大学しかないわけですから、それはまず求められる能力だと思います。



地域再生に取り組むということで知多ソフィア・ネットワークが立ち上がり、半年ほど議論し悩みましたが、新たに課題を出して、「皆さん、お金を出してください」と提案してもお金が出てくることはありません。企業が地域振興でお金を出すということは絞られて来ています。この時点で理解してもらうのは無理だと判断し、お金は集めないことにしました。考え方としては、課題を検討して、自分のところがやりましょうということになった時に、費用負担するなり、外部から資金を導入するという形でお金を作るということで、一切費用負担なしで動き出しました。また、仕事のかなりの部分が、商工会議所がやったほうが良いと思われる仕事とか

ぶってくる可能性がありますので、経済界にも入っていただいて、既存組織との摩擦を少なくしながら、かつ、庇護者の立場でいていただくという地域連携組織を作ったというわけです。

### <地域再生のとりのくみの第一歩は「地域の総合的把握」から>

当たり前のことですが、地域再生の取り組みというのは、地域を総合的に把握しないことにはできないことですが、幸い電源地域振興調査費をいただきましたので、産・官・学・民が連携したテーブルでビジターズ戦略を策定しました。その報告書の最後に8つのプロジェクトを興して、そこに実施の責任者名まで入れました。経済会議が担当するものもあれば、企業や行政が担当するものもあり、それら全部を知多ソフィア・ネットワークが付いてやりますという形で、みんなで継続的にやっていくことになりました。何でそういうことをやるのに協力しなければいけないのか、という話が出てこない状況を作っていくということで、地域全体で、行政、民間も含めて動ける状況を作ったということです。やっていく順番は、実現可能性の高いところからです。必ず、成功事例ができる、ということからやっていくのは、ネットワークの信用性を高めていく上でも、絶対、必要なことです。やっては失敗、やっては失敗では、ネット



ワークが継続できませんので、絶対に成功する  
というところから、やっていくのです。

また、知多半島の人口は約60万人で、10の自  
治体にまたがる地域ですので、どうやって皆に  
知らせていくのかという点においては、できる  
だけ話題性のあることを作りながらパブリシテ  
ィで広報していく。何かをやろうとして動き出  
していくとどこにどういう人がいるというのが、  
必ず、見えてきます。動かない限り、絶対、分  
かりません。次の組織をどう組んでいったら  
いいのかという点で、ネットワークというのは動  
かなければ、人も資源も価値も見えてこないも  
のです。

伸縮自在のアメーバー型組織と私たちは言っ  
ているのですが、あまりがっちりした組織はつ  
くらず、適宜、必要と思う人を集めて課題実現  
に向けて動いていく組織にするという動かし方です。

#### <観光・集客交流事業、振興という切り口>

知多ソフィア・ネットワークを立ち上げた段  
階で、2005年の中部国際空港開港と愛知万博開  
催に合わせて、最大の課題を観光とクオリティ  
プロダクツとしましたが、観光集客交流事業は、  
ソーシャルキャピタルを醸成していく、地域の  
力で、自分たちの力で地域をまとめていく切り  
口としては、非常にいいのではないかと思います。  
今、国の方針もあって、観光振興と言われ

ておりますが、そういう意味では、お金が付き  
やすいので、動きやすいですし、ソーシャルキ  
ャピタル醸成のためにお金を導入していくと活  
きてくると思います。これは、従来型の観光資  
源の衰退で、地域資源の見直し作業が始まって  
いる。たくさんの資源や人の知恵や歴史や文化  
の蓄積がありながら、それを活かしかれていな  
い状況が日本の中にあると思うのですが、それ  
をもう一回自分たちの力で、組み立て直すとい  
う作業をやるという点で観光振興というのは非  
常にいいのではないかと思います。国の光を見  
るとというのが観光であるとよく言われますが、  
地域の誇りを育てるという点では、非常に大事  
な視点で、とりたてて奈良だ京都だということ  
ではないにしても、どの地域にしても、先人が  
積み上げてきたその地域の歴史や文化があるわ  
けなので、それを正確に把握することで、自分  
たちの地域に対する愛情と誇りを育てるとい  
うことは、ソーシャルキャピタル醸成にとっては  
欠かすことのできない要素です。

観光というのは一企業ではできません。必ず  
連携しないとできません。交通機関、宿、素材  
を提供する農業、漁業、それから飲食店、お土  
産屋、地域全体が繋がらざるを得ないという要  
素を持っています。従来型の観光ではもう人は  
来ない状況であれば、新しい観光を目指さなけ  
ればいけないということですから、そのネット  
ワークのなかで、どうしようかと考えざるを得  
ないのです。

また観光は、経済効果が非常に広く波及する  
ということが言えます。この地域には「知多四  
国霊場めぐり」があるのですが、巡拝者の方々に  
何にいくら使ったか、聞き取り調査したところ、  
1年間で6万人の巡拝者があり、約32億円の  
地域経済波及効果があるとの結果が出ました。  
経済効果が地域全体に広がることを実証し、皆  
さんに納得してもらおうと、そのあたりから、行

観光・集客交流事業、振興という切り口

1. 従来型の観光の衰退により地域資源の見直し作業が必要
2. 国の光を頼る」のが観光＝地域の誇りを育てる
3. 着地型観光＝自らが出した情報発信し、来て欲しい人に来てもらう
4. 地元の関係機関・人が連携せざるを得ない
5. 広域的なつながりが必要
6. ネットワークの中で新しい価値を生み出さなければ成功しない
7. 観光、集客交流事業は経済波及効果が薄いが広範囲に及ぶ
8. 多様な業種のネットワークをつくりやすく、協働事業を実施する中で信頼を育てる場となる。
9. 「信頼」や「互恵関係」はネットワークの中での具体的な仕事でしか育たない。
10. 行動の中からしか新しい価値は生み出されない。

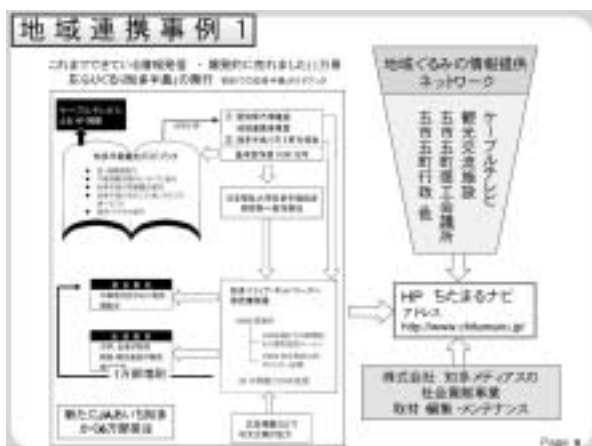
⇒ソーシャルキャピタルの醸成

Page 8

政の姿勢が少し変わってきて、観光パンフレットに霊場めぐりの案内が入るようになってきました。こういう中で信頼関係が育つような振興策を取っていく必要があります。やはり一緒に苦労しながらやっていくと、お互いの信頼とか、立場への理解が生まれてきますし、また、ネットワークの具体的な仕事の中でしか、それは育たないと思います。

### < 地域連携事例 1 >

地域連携の事例として、まずは知多半島の「観光ガイドブック」を制作しました。万博を推進していくのに、愛知県が地域ブロックごとに地域連携事業をやりなさいという課題がお金を付けて要請され、その連携事業の一つとして、知多半島の「観光ガイドブック」制作プランが採択されました。まず、知多半島の10市町で1万部を制作し、その後、著作権を知多ソフィア・ネットワークに無償譲渡していただき増刷、中日新聞社に販売委託し書店発売を行いました。また、地域ぐるみでの販売を組織し、遠方のお得意様に配布して下さい、これを持って万博に来て下さい、というお願いを様々なところでいたしました。このガイドブックをベースにして地元のケーブルテレビが、社会貢献事業という意味で、情報発信できるように、観光案内のホームページを立ち上げました。



### < 地域連携事例 2 >

「中部国際空港活性化調査」として、空港発着のスポットツアーとしてコースを組み、その中に地域連携の要素を含ませました。例えば、知多半島の真ん中あたりにある、知多市の「岡田」は、紡績業が盛んであった地域です。ここに、古い料亭が残っており、蔵を使って機織りができ、おかき屋があり、地域の街並みを案内する観光ボランティアガイドがいました。これらを結びつける形で、料亭で食事をして、地域ボランティアガイドが街並みをご案内しながら、機織り体験を行い、おかきを買って、バスで空港に戻るといったツアーになりました。参加者アンケートでは、満足度の高さは、地域の人と交流できたという要素が大きかったようです。結局、この調査が終わったあとも、岡田のまちが開けて400年になることから準備されていた、400年祭推進の力にもなっていったと言えます。



### < 地域連携事例 3 >

新たに中部国際空港が地域資源としてできたので、大きな要素として活用しなければならないという課題があります。ただ、連携の相手として空港も地域の顔がまだ見えない。地元にとっても空港の顔が見えない。その関係を近づけるために、スポットツアーを行う前に、関係者を招いて発足式を行い、これから先、一緒に

にやっていくという基礎づくりに取り組みました。



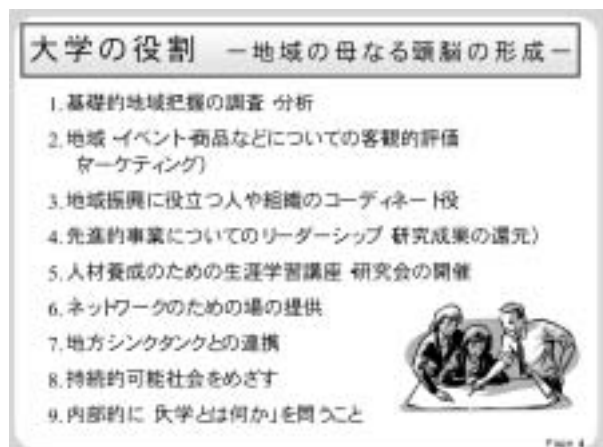
スポットツアーが終わる少し前に、空港で「知多半島の観光と物産展」をやらせてほしいというお願いをいたしました。これからも日本にはたくさんの空港ができますが、顔の見える空港、地域の顔の見える空港にしていけないのではないか、という私どもからのアプローチで実現したものです。地域の祭や文化を紹介したり、物産を売ったりして、空港の顔を作っていくということです。空港というのは、私どもも地域からみれば、ずば抜けて大きな組織です。しかも、必ずしも地元というのは知多半島だけではなく、出資しているのも、3県（岐阜県、愛知県、三重県）と名古屋市ということで、どうつきあっていくか、まだまだ課題が残っておりまして、ちょうど開港1年を迎えたときに空港のあり方にマスコミからかなりの批判がありました。万博も終了し、来港者も減少してきたときに、知多半島の観光圏自体は、万博最盛期と変わらないくらいの集客力を示していました。ですので、空港としてもそこで、地域と一緒にやっていく、いかなければならないということに気づかれたと思うのです。そこから、空港との間で話し合いを行うようになりましたが、この形はこれから、どう動いていくかは分かりません。一つの試みとして、難易度の高い連携組

織ですけれど、私どもが繋ぎながら、何とかやっていこうと思っています。

### <大学の役割

#### - 地域の母なる頭脳の形成 - >

「大学が地域の母なる頭脳である」と言っているわけではないのです。研究蓄積の論文がいくつあっても、そんなものは、地域の母なる頭脳にはなり得ない。具体的な行動を組織することができ、成果をあげることができないと、地域の母なる頭脳にはなりません。これは地域ぐるみで、地域の母なる頭脳になるものを育てていこうということであり、やはり、大学やシンクタンクの役割が非常に大きいものです。

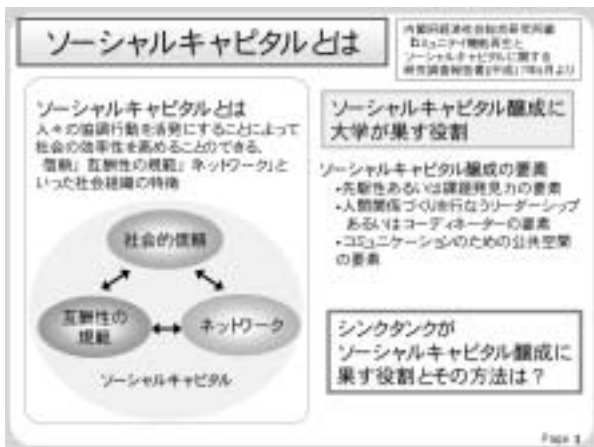


私どもにとって、大学内部で地域連携の取り組みをやっていることが、まるまる受け入れられているかといえば、それはなかなか難しいものがあります。地域を体現するような商品ということで、地元のミツカングループが江戸時代からの醸造法で作っている粕酢を使って、江戸時代のおすしを復元しましたが、すしをつくるのが大学の仕事かとか、費用対効果はあるのかということは、絶えず出てきます。ただ、そもそも大学とは何なんだということが問われて、世の中にとって、人々の生活にとって、役に立つことができなければ、大学ではないのではないかという問い返しをしながら取り組んでおり

ます。

## <ソーシャルキャピタル醸成における「つなぐ」能力>

「ソーシャルキャピタル創生」という言葉を、内閣府の資料ではお使いになっていますが、私は、知多半島らしさを出して「ソーシャルキャピタル醸成」という言葉を使わせてもらいました。この地域は、醸造業が活発な地域であり、酢や味噌造りでは、今年、仕込んだ材料と何百年間も蔵に住んでいる酵母菌とが作用しあって発酵作用をおこしてできあがっていきます。私自身、そういう認識やイメージがあったものですから、創生というより、地域の中でいろんな酵母菌が働きながら作り上げていくということで、醸成ではないかなという感じがしております。



一番大事なことは、現状把握と問題整理ができるということで、これがないと、地域の進路を見定めていくということではできませんし、ここが正確であるかどうかということが信頼の要になります。これを大きな文脈の中で把握してこそ、提言ができます。

こういう問題がありますよ、報告書が出来ましたよというだけでは、誰も取り組んでくれません。私も、ビジターズ戦略を作っているあたりから、いろいろなところから講演や懇談会の

お声がかかって、頼まれたら、絶対に断らないということで、出かけてまいりました。そういうことができないと、地域が動かないということです。

また、政策提言できるだけでは駄目で、政策実施のための方法と順位が具体化できなければいけません。これは、地域の機関や行政や人の顔が見えていないとできません。どこであればこれを実施していくかが見えないと、方法と順位が具体化できないということがありますので、これは地方シンクタンクでないとできない仕事だと思っています。ここは非常に大事な要素です。この前のところまでできるところは多いですが、その後に繋がっていくように、自治体や様々な機関、市民グループ、個人に応じた役割のコーディネートができるのは、政策実施のための方法と順位が、具体的に見えていないとできません。

できないことをやるべきだと提言したのでは挫折します。ネットワーク内の信用もできあがらず、すぐ崩れます。できることを、できるように提案して、動きをつくらなければならないのです。ここは信用というものを作り上げていく要素というのが、非常に大事なことです。そして、達成できたことを評価し、その成果をもう一度普及していくということが重要です。そのプロセスの中で、もう既に次の課題の提言が準備されているということです。大変つたない話で申し訳ありませんが、あとはみなさんの議論で深めていただければと思います。

財団法人とっとり政策総合研究センター 研究員 安達 義通

「産学連携と地域再生 ~シンクタンクの役割~」。これが本研修で我々に与えられたテーマであるが、参加前、私にはかなり手強いものを感じられた。参加に際して、あれこれと考えてみたが、どうにもすっきりしたストーリーが形成できない。まず、産学連携から論を起こしてみた。「産学連携」推進の本質は、産（企業）における研究開発機能を、大学との協力の上で向上させていくことによって、製品の高付加価値化を促進し、地域企業の国際競争力を強化していくことであろう。だとすれば、個々の地域企業の再生は図れても直接的には「地域の再生」には繋がらない。また、企業が欲しているような研究を行っている大学が地元にあるとは限らず、だとすれば、産学連携＝地域再生という図式は成り立たない。すなわち、産学連携とは、本質的には企業と大学（の研究者）との個別的連携ということになるのではないかと。さらに、我が国で進められている「産学連携」は理工系が中心で、専門ごとに細分化されている。文科系出身の私にはひとつひとつの技術の理解は、能力的にも時間的にも限界がある。産学連携において、地域のシンクタンカーとして、中心的な役割を担うことができるのだろうか？

シンクタンクの役割。これも難問であった。日本には、欧米のような政策提言型のシンクタンクは存在しないと言われて久しい。いや、ひとつだけある、それは霞ヶ関だ、という意見もある。そういったことを考えていると、「地方シンクタンク」というものがなかなか明確に定義できず、そのため、役割を限定することができない。また、誰に向かって仕事をするのだろうか？ 県庁のため？ 市町村のため？ 市民のため？ 地域企業のため？ そんなことを考えながら、研修前に自分の考えをまとめようとしたが、準備不足のまま、本番に突入することになった。

研修最初のプログラム、日本福祉大学知多半島総合研究所の山本勝子先生の講演を聞いて、これらの考えが一挙に吹き飛んだ。というより、これまでのストーリーのない思考の断片がすべてリセットされたような気分になり、軽い混乱のなかでお話を聞き続けた。山本先生のメッセージを私の関心に引きつけて要約すると、「まず、地域再生ありきであり、そのために、産も学も利用すればいい、あるいは参加したい組織・人を探してくればいい。地域再生プロジェクトを企画し、産学連携のコーディネートしながら、実行するのがシンクタンクの役割だ」となる。それを「ソーシャル・キャピタルの醸成」という言葉でまとめておられた。また、製造業ではなく、観光、あるいは食をテーマに、地域資源を掘り起こしながら、産学連携を展開されているということにも、眼から鱗というような気分になった。そんななかで、私が学んだことのひとつは、頭で考えすぎず、原理原則にこだわらず、修正を続けていく現場主義的な地域再生のあり方だ。

続くグループ討論では、序盤は多少混乱を引きずっていたが、山本先生のメッセージを参考にしながら、研修の終わりまでにグループ提案を形にしていくことに自分のタスクを集中させた。グループメンバーにも恵まれ、ある程度の共通の問題意識も共有していたようで、いくつかの欠点を残しているとはいえ、それなりに形にして発表することができたと思う。

地域に不足しているのは、山本先生のような活動家であり、先生のプロジェクト推進力には畏敬の念すら感じた。そして、オーガナイザーあるいはプロデューサーとしてのシンクタンクの重要性も十分理解できた。しかしながら、それがシンクタンクという「頭脳の集団」の本質的なあるいは最大の役割なのだろうか？ 例えば、ネットワークの形成に寄与するアクティビストとしてではなく、地域を客観的に観ていくアナリストとしての役割も重要ではないか？ そういった疑問が、研修が終わった今でも、私の頭の中に留まり続けている。おそらく両者のバランスを取るようなスタンスの実現が、私というシンクタンカーの課題であり続けるように思う。このことを再確認できたという意味でも、私にとって、実りある研修であった。関係者各位に感謝する次第である。

「知多半島」という言葉を聞いて即座に連想したのは、夏の太陽に煌く海と砂浜のイメージ。潮風に当たりながらの海辺での議論を期待しつつ、到着したのは「海の家」とは程遠い、ホテルといってもよいくらいのゴージャスな日本社会福祉大学の新校舎でした。「研修」と名の付く集まりに参加するのは本当に久しぶりだったので、やや緊張しつつ会場へ。それに、なんと言っても今回の「産学連携と地域再生」というテーマは、ちょっと難しく、そこに地域シンクタンクの役割論を結びつけた場合、果たして議論の方向性自体が定まるのだろうかという不安もありました。目下、脚光を浴びている産学連携の事例はといえば、そのほとんどがロボット工学やバイオなどの先端テクノロジーの領域だからです。

その懸念は、知多半島総合研究所の山本勝子氏の基調講演を伺って、すぐに掻き消されました。山本さんこそ、地域の資源を発掘し、付加価値化して活用する方途を常に模索し、そのプロセスに大学と地元企業・産業界を巧みにつないで巻き込みながら地域を元気にするという、まさしく産学連携による地域再生を実践しておられる方だったことを、改めて知りました。

山本さんの豊富なご体験を踏まえたお話はどれも説得力に満ち、感銘を受けるものばかりでしたが、特に「なるほど!」と思ったのは以下の3つです。

- ・ 先ずは、地域のことを地域の人々が知ることによって地元への愛着が生まれる。そこに郷土の歴史学者や地理学者などの活躍の場がある。（確かに、産学連携の場にもっと人文系・社会学系の研究者が必要ですね。）
- ・ 地域再生に不可欠なのは、「よそ者」と「若者」と「ばか者」（情熱家のこと）。（「創造都市」論の提唱者であるイギリスの都市計画家C.ランドリー氏も、確か似たようなことを言っていたような気がします。シンクタンクはある意味、これら「三者」の役割を同時に兼ね備えることができますね。）
- ・ シンクタンクは提言して終わりではなく、それを実践すること。（think tank からdo tankへ、という掛け声が以前もありましたね。）

さて、続くグループ討論も中身の濃い充実したものとなりました。討論の内容については、グループリーダーの安達さんがみごとに（しかも実際の議論より高レベルに?）まとめてくださったので、どうぞそれをご覧ください。私自身にとって刺激的だったのは、何より出身母体が自治体や企業の方々、あるいは洋行留学から戻ってきたばかりの方など、多様な背景と経験を持つメンバーの方々との出会い、議論ができたことです。まさにグループ自体が「産官学」の縮図のような構成で、短時間ではありましたが共同作業を通じて、さまざまな立場からの発想や意見をつなぎ、融合させながら、新たなものを生み出していく醍醐味を肌で感じることができました。

結局、実際にいろいろな領域の人に会って、フェイス・トゥー・フェイスで語り合うことによってしか、意味のある連携は生まれませんよね。そういう当たり前のことをなおざりにし、つつい忙しさにかまけて机に座ったまま、情報収集や意見交換をネットやメールに頼りがちな自分を反省した次第です。

未筆ながら、お付き合いいただいたグループ・メンバーの皆さん、そして有意義な研修会をセットしてくださった事務局KIISの太田さんに、心より感謝申し上げます。

産学連携と地域再生という、それぞれでも大きなテーマを関連させ、その上でシンクタンクとしての役割を考えるという、なかなか骨太なテーマ設定である。事前に行われたプレディスカッションでは、各自が筋の通った考えを展開し、感心すると共に、身の引き締まる思いがした。

シンクタンクの役割と言え、地域の分析研究、問題提起提言と誰もが考えることであろう。さらに、コーディネーターあるいはファシリテーターという点もあげることができるかもしれない。しかしながら、それを行動し、実践するというのは、難しいことである。その意味で、最初に行われた日本福祉大学知多半島総合研究所山本所長代理の講演は、まさに衝撃的であった。確かに、地理的な条件や愛知万博の開催など、好条件が重なったとの見方もできる。ただ、それを実際に行ってきた強みというのは、瞭然である。シンクタンクとしての一つの理想を見た気がした。

グループ討議では、はじめは大きなテーマを前にし、なかなか糸口を見つけことができず苦戦した。議論を重ねていくうちに、徐々に方向性も見え、討論も盛り上がってきた。われわれのグループは、自治体系が3人、銀行系が1人、プロパーが1人と比較的バランスの取れたメンバーということもあり、それぞれの視点から屈託の無い意見が出された。一つのテーマに対して、様々な地域のシンクタンクから、様々な人が、様々な意見を出し、強い刺激を受けた。立場は異なるが、皆シンクタンクとしての理想があり、強い責任感を持っていた。現状よりも更に一步進もうという向上心を共通意識として持っていたのではなかろうか。中間発表の際は、本当に中間的な発表しかできず、着地点も見えなかったが、最終日には、グループとして結論を出すことができた。最終発表を終えたときは、安堵感や達成感を分かち合った。当初は、1泊2日の研修で十分すぎる時間と考えていたが、実際にディスカッションを行うとみるみる時間が過ぎていく。しかしながら、限られた時間の中でも結果を残すというのもシンクタンクの役割である。今回は、全部で3つのグループがあったが、どのグループも最終報告には、提案や提言をきっちりと行っていた。さすがシンクタンカーである。そして、各グループの発表がそれぞれ違う視点、違う切り口で行われていたが、どれも大変興味深いものであった。

シンクタンクの役割を考えてみると、研究を行うが、大学の持つアカデミズムとは一線を画している。また企業のように営利を追求するものでもない。しかしながら、それぞれの要素を兼ね備えているのも事実である。だからこそ、産と学の橋渡しを行うことができるのではないか。決して派手な仕事ではない。むしろ裏方の仕事であり、地味である。ただこうした地味な存在があるからこそ、地域が再生し、発展していくと思う。研修を通じて、改めてシンクタンクの役割ということを考えることが出来た。もし研修がもう1日あれば、更に多くのことを学ぶこと（そして、より一層交流を深めること）ができたのではと思う。

最後になりましたが、このような機会を設けていただいた地方シンクタンク協議会の皆様、並びに貴重なご意見をいただいた参加者の皆様、どうも有難うございました。

「行ってみるかな。」

現在の職場「シンクタンクふくしま」に来て3ヶ月目。職場の先輩が中堅研究員研修会に2年前に行った話を聞いた翌朝、決心した。愛知県まで行けるのも魅力だったし、総務が中心で事務所の中にいるだけの日々に窮屈さを感じ始めていた。

東北新幹線のトラブルで東京到着が1時間弱遅れたときには慌てたが、なんとか知多半田駅に到着。日差しの強さに驚く。バスに乗り日本福祉大学に着き会場に入ると、なんとなく「シンクタンカー」の雰囲気を感じた人が多く見えてとても不安であった。事前に行っていたメールでの議論もしっかりした意見が多かったし、場違いなところに来てしまったかと考えていた。

地域を見事に再生させている事例の講演を聴き、研修参加者の自己紹介へ。驚いたのはほとんどが自治体系シンクタンクの職員で、市町村職員それも1・2年目の人ばかりだったことだ。その後、グループ討議を行ったが、意見は活発。自分以外の方がそれほどの経験年数を有していないようには見えなかった。

夕食及び夕食後の討議（討議用の部屋にビールが準備されていたときには驚いた。素晴らしいご配慮である。）を終え、ホテルの部屋に帰ってなんとなくここ数ヶ月を回想してみた。自分は現在の職場に来てから成長できているのだろうか。とりあえず何をして良いか分からない状況の中で、「この一年は様子を見ていければいいや。」「今のところ言って間違っていることになるなら、言わないでいただいた方がいいな。」等考えていなかったか。職場の異動は何回も経験しているのに、毎回同じ事を繰り返しているのが情けなかった。

さらに感じたのが、シンクタンクで勤務する上で特に前向きな姿勢が求められていることである。今日の討議ではアイデアが数多く出されていた。最近の自分はアイデアを他人に示すことに対して、反論されることを恐れて言い出すことを控え始めていたし、他人が示したアイデアを「そんなこと出来るか」「なんでそんなことやるの」とすぐに批評するような見方をしてしまっていた事を反省した。

翌日、さらに討議を深めて各グループ毎に発表を行った。グループにより向いている方向は異なるが、方向性を一つにして進歩的な提案を行っていた。組織として前を向くこと、そして構成員も前を向き踏み出すことが重要なのだと感じた。

最後になりますが、この研修を作成して下さった地方シンクタンク事務局様、同じグループとなった「阿波番茶まんじゅう」チームの方々、そしてあまり多くはお話しできませんでしたが他チームの方々にお礼を申し上げます。

（追記）例年は東北で行われるとのことだが、知多半島を見ることが出来たことも収穫でした。（ミツカン本社ビルと社長宅の大きさにびっくり。古くから地域に根付いた産業ということを実感した。街を詳しく案内してくれたタクシーの女性運転手さんが印象に残っている。）

### 【新鮮な発見】

午後開始、翌日の昼間に解散という実質1日間のコンパクトなスケジュールでしたが、新鮮な発見があり、非常に充実した時間を過ごせました。地方シンクタンク協議会の研修への参加は今回が初めてですが、他地域のシンクタンクの方と話ができて非常に刺激を受けました。中でも、民間シンクタンクに所属している私には、自治体シンクタンクの方との話は非常に興味深いものがありました。例えば、地域活性化の取組み事例の活用についての話が及んだときに、民間シンクタンクでは対象エリアに一定の地域性を有しているものの複数府県の業務をしており、ある地域の成功事例の基本的要素や考え方を他地域に取り入れることを考えたりしますが、明確な対象エリアを有する自治体シンクタンクでは、成功事例は地域間競争を視野に入れた戦略として他地域へ活用を促さないとの意見に、主体者として取組まれている姿勢を感じました。これは、一面的切り口による特徴かもしれませんが、ここで見られた自治体シンクタンクの持つ主体者的志向と民間シンクタンクの持つ客観的志向といった両者の姿勢は興味深いものでした。

### 【情報交換の場】

シンクタンクと言っても多様な組織があり、相違点はこのような機会でないとは発見できないものであり、そういう点では、テーマに対する議論だけでなく、自由な話題のもとに、もう少し交流する時間もあつたらよかつたと思います。また、各シンクタンクから頂いた地域の事例資料も地域情報を持っているシンクタンクからの貴重な情報であり、一機関では集められないとても興味深い情報で、このように共有できる情報を交換するネットワークへの展開を期待します。

### 【大学と地域、大学とシンクタンク】

プログラム内容では、日本福祉大学知多半島総合研究所の地域での取組みを拝聴し、大変刺激を受けました。大学が地域に働きかけて、地元の企業、経済団体・関連団体にまたがる組織を作り、プロジェクトを立ち上げ、具体的事業を実施していく行動力と、大学が地域との係りを深く展開されていることに衝撃に近い驚きを感じました。このような大学が地域にあればシンクタンクは不要なのではという思いも浮かんできました。

ただ、日本福祉大学のような大学は稀有な存在であり、大学が地域貢献をするには、学部学科の構成が取れていることや大学の方針、研究者のインセンティブの確保等、多くの条件をクリアした大学しか取組めず、当大学のように地域貢献を積極的に展開できる大学は限られていると思われます。また、山本氏のお話にも、「大学による地域連携が期待されているが、大学はすぐに対応できない。」という指摘があり、そういう点では、地域の大学の専門性を鑑みて、コンサルが大学の知の活用を図っていくこと、また、地域に開かれた大学への展開の糸口を地域側から大学にアプローチしていく機能を持つことなどは地域に目指すシンクタンクの役割ではないかと思えます。大学も有益な地域資源として、相互に連携していく取組みを仕掛けていくことが重要かと考えます。その連携は固定的なものではなく、アメンバー組織のように、自由自在に変形しながら得意分野を生かす形態を構成できることがこれからのネットワーク形成に重要なものかもしれません。

### 【細やかなホスピタリティ】

最後に今回の研修会では、山本氏の細やかなホスピタリティにより、話に聞くだけでなく、江戸時代の再現寿司を頂く等の体験ができたことが短い滞在ながらも知多半島を感じられる機会になったように思います。そのような地域を表現するホスピタリティあふれる姿勢もとても勉強になりました。

また、事務局の皆様にはお世話になりありがとうございました。事前にメールでの意見交換の機会があり、議論に入りやすかつたと思います。今後もこのような機会がありましたら積極的に参加させて頂きたいと思えます。

初日の日本福祉大学知多半島総合研究所の山本様のご講演をお伺いし、山本様がいかに知多地域のことを理解し、知多地域に根ざした活動をされているかが非常に伝わってきました。反面、大学という強大なスポンサーのもとで自主研究を業務の中心に据えられ、委託業務は随意契約分のみという体制を羨ましく感じました。

大学が郊外に移転するという、一般的にはマイナス要因としてとらえられがちな要素を逆転の発想で生かし、知多半島に根ざすために知多半島総合研究所を立ち上げ、地域の歴史・文化を研究しようと着目された点がまず素晴らしいことだと感じました。現在では、大学と地域との連携という話はよく耳にしますが、日本福祉大学が三浜町へ移転した1983年当時のこととしては、画期的な取組みではなかったかと思います。

また、キャンパス内での研究にとどまらず、「知多ソフィア・ネットワーク」を立ち上げ、積極的に地域再生・地域振興に取り組んでいる点に感心しました。中でも、江戸時代の文献までさかのぼることで「尾州早すし」を再現し、地域の祭りに合わせて販売するという、まさに「行動するシンクタンク」としての手本となる取組みだと思います。他にも、川鶉の研究・取組みなども、発想を転換する事により地域の課題を資源に変えた良い例だと思います。

グループワークのテーマに関しましては、当初、産学連携・地域再生・シンクタンクの役割という3つのキーワードを融合するのは難しいのではないかと考えていました。個人的には、産学連携はすなわち地域再生につながるものではなく、異質のものであり、一般的には、「産(=企業)」も「学(=大学等)」も、地域再生・地域振興のために取り組んでいるわけではなく、戦略的にこれを結びつけるのには無理があるのではないかと考えていました。しかし、グループで議論を行う中で、地域と密接に結びついた産業として農業に着目し、その地域の振興なくしては発展し得ない産業を見出したことで、農業をテーマに産学連携を行うことで、地域再生につながるのではないかと仮説がたちました。その後は、各メンバーが地元での具体的な取組みの紹介を行うことで、具体的な方向性が見えてきました。皆さんの全国での実際の取組みを聞くことで、シンクタンクの役割も幅広く捉えることができたと思います。また、グループワークにおいては、総合研究開発機構の小野総括主任研究員の的確なリーディングと随所にいただいたアドバイスにより、行き詰まりをみせた際の良き道標となり、大いに助かりました。

グループワークに関しては、作業時間が少し短かったため、まとめる時間があまりなかったような気がします。また、せっかくの機会でしたので、フィールドワークのような形で現地の視察を行う機会があればよかったと思います。そういう意味では、あと1日、日程に余裕があればよかった、というのが正直な感想でもあります。

今回の研修に参加した一番大きな収穫は、当日の研修会で知り合えた全国の研究員の方々とのネットワークだと思います。このネットワークは、今後の活動を続けていく中で大きな財産になったと感じています。今回の出会いを生かすことができるよう、意見交換等を続けて行きたいと思います。

「地域再生とソーシャルキャピタルの創生」というテーマで講演・問題提起をしていただき、知多半島における魅力ある資源をどうやって結びつけどう発信していくか、その第一歩となるのが「地域の総合的把握」からということが特に印象に残った。地域が共に再生に取り組むためには、まず地域のことを把握しなければならない。地域再生の連携「知多ソフィアネットワーク」が自費出版で「知多半島が見えてくる本」の出版に至るということは、“本気”の表れと受けて取ってもらえたはずである。

そして、実際の活動は「成功を積み重ねる」ことで連携の強化と信用を拡大していくということが、非常に重要な事だと思った。「地域再生」という目標を共有しているとしても、立場が多様であれば思惑も多様であろう。そこで結果がなかなか目に見えてこなければ、いつのまにか形だけのネットワークになったかもしれない。小さな成功でもそれを繰り返しながら、行動の中からネットワークを広げ信頼関係を築き、新たなプロジェクトを展開していくという、連携の進め方について大切なことを学んだ。

また、その中で客観的に分析し現状把握や問題整理、政策提言ができ、様々な機関、個人に対してのコーディネート機能を持つ、シンクタンクの「つなぐ」役割の重要性を認識した。

グループ討議では、「産学連携とシンクタンクの役割」について討議をしたが、なかなか先の見えない討議になってしまった。研修の参加者が持ち寄った産学連携事例を参考に、ということも考えたが、ほとんどはグループメンバーのアイデアベースで新たな産学連携とシンクタンクの役割についてモデルを構築していく作業となった。

グループでの討議のまとめは別になるが、最初はどうのように討議の方向を持っていけば良いか、また、どの程度の形にしていけばよいのか、まさに手探りで意見を出していったが、時間を気にしつつもリーダーを中心に活発な討議となったと思う。

「産学連携」というと、どうしても理系分野が中心で企業と大学が直接受委託や共同研究をするというイメージがあり、文系分野や地方のシンクタンクが関わる「産学連携」はなかなかアイデアが出てこないと想像したが、地域にとって今必要なこと、企業にとって今必要なこと、大学にとって今必要なこと、そしてシンクタンクが果たせる役割を整理していくことで、文系分野における産学連携のモデルも十分に構築できることが分かった。

山本先生の講演から「小さな成功でも繰り返すことが大切」とお話を頂いたが、まさに全国各地で「こんなことやっているんだ」というメンバーの事例をヒントに、実質5時間余りで討議をまとめ、発表しなければならないという、タイトスケジュールではあったが、グループ討議をまとめ、発表に至ることができた。

「産学連携」におけるシンクタンクの役割については、産学連携事業についての検証や提言というシンクタンク本来の役割をした方が良いという考えと、ネットワークの構築や場の提供など自らが行動するというシンクタンクの新しい役割が必要という考えがあり、十分に討議は尽くせなかった事が残念ではあったが、全国に同じ立場で地域振興について日々取り組んでいる参加者と討議できたことは今後生きてくるはずである。この研修で得たもの、考えさせられたことを日々の仕事にも活かしていきたい。

シンクタンクの研究員はその形態を問わず、ともすれば日々の調査・研究業務に忙殺され、関係者との交流も顧客、行政、大学教授、企業等に限定されてしまいがちである。他のシンクタンクや研究機関が主催する講演会や研究報告会に参加することはあっても、その研究員と連携・共同して何かの成果物を仕上げるといった機会はなかなか巡ってこない。

そうした中、わずか2日間（午後・午前あわせて実質1日間だが）とは言え、複数の同業者（？）とグループになって問題意識をすり合わせ、議論し、限られた時間内で提案レベルにまでまとめ上げる作業を体験できたのはよかったと思う。

与えられたのは「産学連携」というこれまでかなり語り尽くされてきた感があるテーマであったが、銀行、行政、企業等からの出向者、あるいはプロパーの方など、さまざまなバックボーンを持つ研究員たちが、それぞれの立場からそれぞれの見方を展開されていたことが興味深かった。一つのテーマでも地方ごと、シンクタンクごと、そして研究員ごとに抱えている問題意識や課題が微妙に違っており、決して共通の解決策などはないのだという点が改めて認識できた。これは本研究会に参加して私自身が得た最も大きな成果だったのかもしれない。

今回は全部で3つのグループに分かれて議論したが、私が所属した第1グループでは（財）とっとり政策総合研究センター研究員・安達義通氏を中心に、「中心市街地活性化」を軸としたかなり具体的な提案をまとめることができたのではないかと自負している。同氏の熱意と素晴らしいリーダーシップに改めて敬意を表したい。

別のグループでは農業分野での産学連携を取り上げておられたが、これは私の発想からするとまったくの埒外にあっただけに、個人的には非常に新鮮な感覚を持った。

また、本研修会のホスト役を務めていただいた日本福祉大学知多半島総合研究所所長代理・山本勝子氏の講演・問題提起では、知多半島における地域振興に奔走されている同氏の、まさに「行動するシンクタンク」を体現したような活動ぶりに感心させられた。「言うは易し、行なうは…」型の施策や提言が世にあふれる中、本当に貴重なお話を聞かせていただいた。

最後に、コーディネーターを務めていただいた総合研究開発機構総括主任研究員・小野稔氏、幹事・事務局を務めていただいた地方シンクタンク協議会の方々に感謝の意を表したい。有難うございました。

今回の中堅職員研修会を企画・準備・運営いただいた地方シンクタンク協議会、知多半島総合研究所、NIRAの皆様、そして、研修会に参加された各シンクタンク研究員の皆様、おかげさまで大変有意義な時間を過ごすことができました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

この4月にシンクタンク職員の片割れとなったばかりで研究員として新米である私としては、地方シンクタンクのあるべき姿について、明確なイメージをつかめないでいました。特に、弊財団のような行政主導で設置されたシンクタンクでは、取り巻く環境の変化に伴い、組織のあり方を含め検討が求められる状況でもあり、今回の研修会では、他の機関の現状を含め、様々な情報を得る良い機会という気持ちで参加させていただきました。結果として、期待以上の成果を得られたことに満足しています。

思い返せば研修会当日は大変な猛暑でございました。名鉄知多半田駅前を12時50分に出発した日本福祉大学行きバスは、右に左に曲がりながら走り続け、やがて、ため池が点在する田園風景と閑静な住宅街とが広がる一画へと辿り着きました。猛暑ゆえか付近に人影は見あたらず、夏休み中であるため学生の方の姿もまばらで、ひっそりとしたたたずまいの中に建つ瀟洒なキャンパスが、とても印象的でした。

研修会は、知多半島総合研究所の素晴らしい事例をお伺いすることから始まりましたが、地域に根ざした活動のあり方として、あるいは産学連携のなかで地方シンクタンクが果たすべき役割として、ひとつの理想形を見せていただいたものと認識しており、今後の弊財団のあり方についても大いに考えさせられる内容でございました。

その後のグループ討論の際に、ジャンケンでリーダーになってしまったのは大きな誤算でしたが、幸いなことに、私以外の班員の皆様は優秀な方が揃っておりましたので、議論やとりまとめ、発表までお任せすることができました。無事研修を終えられたのは、すべて班員の皆様のご尽力によるところでございます。この場を借りて、お詫びと感謝を申し上げます。

1泊2日の日程で、夜10時まで討議を重ねるとはいえ、実質議論の時間は限られ、検討結果も掘り下げが足りない、机上のものになっている感は否めませんが、取りまとめられた内容よりもその過程に意義があったものと認識しております。

中部国際空港の開港、愛知万博の開催、好調を維持する企業の数々と、日本で一番元気な東海地方の現状を垣間見る機会が得られたことも、今後の参考になるものと思います。

繰り返しとなりますが、このような機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

中堅研究員という言葉と壮大な研修テーマに、多少の違和感・抵抗感と大いなる気後れとを感じながら、また半分他の方に申し訳ないような気持ちで、しかしそれだからこそ一層、全国のシンクタンクの方々にお会いし、その知識・経験やテーマに対する視点、考え方、取り組み方、また成果への作業の進め方等に触れて少しでも経験を積み追いつきたいという、大きな期待を持って参加させていただきました。

今回の研修テーマは、「産学連携と地域再生 ~シンクタンクの役割~」です。テーマが大きくて手に余る上に、「産学連携」と「地域再生」と「シンクタンクの役割」という三つの対象とその関係を考えるということであり、盛りだくさんでわたくしには少し複雑に感じられました。

さらに懸念は、産学連携というと学にあるシーズをいかに地域・企業に移転し商品化を図るかという、どうしても技術中心の考えから離れられず、産業技術や高度技術についての知識や経験の少ない多くのシンクタンクが如何にかかわっていけるかという疑念でした。

この疑問に対するひとつの良い方向性を示唆していただいたのは、講師の日本福祉大学知多半島総合研究所の山本所長代理様の講演でした。地域の歴史・特徴・特産を活かし、食文化の再生を通じた地域の活性化をはじめ、日ごろの地域との連携活動による数々の実践のお話・成果に、そういう活動もあるのかと改めてシンクタンクとしての活動の新たな可能性を教えていただきました。

ドゥタンクのあり方、地域に密着し入り込んだシンクタンクの活動を強烈に教えられたように思います。お金がなくても創意・工夫と粘り強さそして人を巻き込む行動力で、大きな成果を挙げておられるのには感心させられました。

今年の日程は二日間と短く、参加前に自分としての考えのイメージさえ固められませんでした。班のリーダーをはじめ班の方々の議論や意見・提案により、報告できるだけ結論まで至り感謝しております。

シンクタンカーとして当然のことかもしれませんが、専門用語やカタカナ文字が繰り出され頭がバニク寸前、議論をする以前の段階とまりで議論の内容を理解し把握していくのに精一杯でした。

研修については、まず、積極的でいろいろな個性、才能、経験の方に出会えたことが最大の収穫・成果でいい刺激を受け勉強になりました。ただ、日程がタイトで交友を深めるほどの交流ができなかったことが残念でした。全国のシンクタンクの方々、日頃何を思い・考え・目標とし、どのように過ごしておられるのか、興味があり参考にさせていただこうと期待していました。特に休日の過ごし方などを教えていただきたかったところです。

ところで研修会場ですが、知多半島のことはあまり知らず興味も少なかったのですが、ビールの味は忘れましたが、粕酢を使ったお寿司の美味しかった事は忘れないのではないかと思います。そういう意味では、暑くても地域資源があったり、成果を直接見たり味わったり体験することのできる現地での研修は、非常に貴重な体験ではないかと思いました。

最後にこのような私に2日間お付き合いいただいた班の方々、ご指導いただいた小野様、大変意義のある機会をあたえていただき準備をされた事務局の方々、さらにいろいろとお世話いただいた知多半島総合研究所の皆様感謝いたします。皆様ありがとうございました。

8月4日(金)、5日(土)の2日間、愛知県の知多半島にある半田市において、地方シンクタンク協議会中堅研究員研修会に参加をさせていただいた。事前にはメーリングリストを活用したプレ討論会がネット上で催され、方向性などについて話し合われる予定であったが、なかなか議論という形にはなりえず、参加表明といった形で終了してしまっことは残念であった。メーリングリストによる検討という手法は良かっただけに、もう少し検討期間があっても良かったのではないかと悔やまれた。また、研修会の内容についても各地方シンクタンクから研究員が集まり、討議をするということで、不安と期待が入り混じったまま当日を迎えることとなった。

さて、肝心の研修会であるが、まずグループ討議に先立ち、日本福祉大学知多半島総合研究所所長代理 山本勝子氏より「地域再生とソーシャルキャピタルの創生」をテーマとして、日本福祉大学の地域における役割の取り組み状況、大学内に設立された研究所の果たすべき役割などについて、実例を踏まえながら詳しくご講演をいただいた。実は私の出身は山梨県都留市であり、たった人口35,000人ほどの地方都市であるが、市立の都留文科大学を擁している。この大学という地域資源をどのように活用し、大学側に何を求めていくかがかねてからの地域課題であった都留市に住む私にとって、今回の講演は、非常に参考となる講演であった。

さて、グループ討議の内容についてだが、今回のテーマは「産学連携と地域再生 ~シンクタンクの役割~」であった。私は第二班に振り分けられ、検討をすることとなったのだが、「産学連携と地域再生」とは、産学連携の成果を地域再生に結び付けるべきなのか、地域再生を前提とした産学連携を考えるのか、という点でいわば「卵が先か鶏が先か」に似た議論となり、大いに迷うこととなった。

結局、従来行なわれてきた、TLOなどを中心とした理工系大学と企業の連携では、なかなか地域再生には結び付けにくいという観点から、地域再生を前提条件として、それに向けた産学連携を考えて行こうということとなった。また、この中で、従来の理工系産学連携を「狭義の産学連携」とし、大学生のマンパワーを地域において活用する形まで広げたものを「広義の産学連携」と位置づけ、検討を進めることとした。

しかし、検討に使える時間の制約が厳しいため、ほとんどの議論をこの部分に費やしてしまい、途中経過発表までに有る程度の話がまとまるかどうか、非常に心配であった。何しろ、私は夜の途中経過発表という大役をやることになってしまっていたのだから。

さて、我々の班は地域再生に向けた産学連携を検討していくこととなったのだが、「学」は地域貢献などの活動を展開しやすいのに対し、「産」は利潤を追求するものなのでなかなか地域との結びつきを深めることは容易でない。このため、「産」は地域密着型の産業を選定していくこととなり、検討の中で浮かんできたのが「農業」であった。昨今農業の衰退が叫ばれる中、農業と大学が連携をして地域を再生させていく取り組みは非常に面白いと感じた。また、産学連携を広義のものとして定義したことにより、非常に可能性は膨らんでいくのではないかと、という期待感もあった。結果、農業を取り巻く課題解決に対し、「学」が積極的に関与していくことによって地域再生へつなげていく、というおおまかな筋書きを描くことができたのであった。また、その連携の中でのシンクタンクの役割も有る程度明確にすることができ、途中経過発表は滞りなく終了した。

2日目も前日の筋書きを補強していくことで、この段階でもまだまだかなり粗いものであったが、まとめることができた。検討の結果については、第2班の検討結果をご覧頂きたい。

さて、私は今回の研修において、非常に短く限られた時間で、テーマを定められ、検討を行なうということの難しさを非常に思い知らされた。しかしながら私たち地域シンクタンクの役割は、地域からの課題を提示され、または発見し、その解決策を早急に探っていくことを主としている。こうした中で、多様化していく市民ニーズや、予想以上に速い社会の変化を追っていくためには、今回のような状況下での検討会は非常に有意義であったと思う。出来るならばもう一度期間をおいてまとめの研修会を持てば、より深い検討結果が出せるような気がするのだが。

地域再生とは、個性ある豊かな地域づくりを通じて「地域経済の活性化」と「地域雇用の創造」を実現することとされている。また、起業や大学に対しては、社会貢献という昨今の風潮がある。加えて、自身が所属する地方シンクタンクの立場までもあわせて考える、ということが今回の研修のテーマであった。

しかし、企業の第一の目的は利潤最大化である。起業としての生産が地域振興に繋がることは望ましいと考えるが、地域再生ありきの生産ではない。また、大学の目的は研究と教育である。

個人的には、大学はすぐに世の中の役に立つものを生産する必要は無く、将来に向けての基礎研究こそがその役割だと考えている。すでに見つかっている地域再生という問題を解決することではなく、新たな問題を「見つける」ことこそが、最高学府に求められる能力である。

そういう点から、今回の研修における日本福祉大学 山本勝子先生のご講演は新鮮だった。地域再生を実践する研究者のお話、特に例示して頂いた3つの事例は、大学に求められる別の顔として、たいへん参考になるものであった。

「地域再生のための産学連携とシンクタンクの役割」というテーマで行われたグループ討論では、やはり産学連携と地域再生とのミスマッチが問題だと考え、そこを解消するための地方シンクタンクの存在意義を、確かな結論までは出ないながらも論じることができた。普段はいち研究員であり、直近の問題解決だけを仕事としているため、地方シンクタンクの経営論にまで多少なりとも踏み込んだ思考ができたことは、貴重な経験だった。

最後に、グループメンバーの皆様とは有意義な時間を共有することができ、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

中堅研究員研修会には、「産学連携と地域再生 ～シンクタンクの役割～」というテーマについて深く考えることと、全国のシンクタンクの研究員の方と色々な話をするということという2つの目的を持って参加させていただきました。

まず、日本福祉大学知多半島総合研究所の山本氏のお話は、いろんな意味で私にとっては新鮮なものでした。何かをやるうとする時には、実現は「無理」と決めつけてしまう人もいたりして、様々なご苦労があったことと思いますが、やはり「研究機関としてこの地域に責任を持つ」というその想いと実行力が周りの人をも動かして成功事例につながっていったのだと思います。既成概念にとらわれず、とりあえずできることからやってみて着実に結果を出すこと、また実現可能な政策提言をするという姿勢に、「これからのシンクタンクのあるべき姿」を感じました。

グループ討議では、時間もあまりないということで、まず結果ありきで、“シンクタンクとしては「地域再生」という目的を達成するために、大学や行政、その他いろんな機関をつなげていくコーディネーター的な役割を果たすべきである”という共通認識のもと、話を進めていきましたが、今から思えばもっと紆余曲折して「シンクタンクとは？」ということについて議論したかったなと思います。

シンクタンクとしては、地域にとっての利益は何か、また目先のことでなく未来を見据えた視点が必要になってきています。地域が再生することで、地域の住民が誇りを持ち満足度の高い生活を送れるように、地域資源についてよく把握し、その活用方法を提案し、いろんな機関と連携して具体的に実行していくことが重要であると考えます。

具体的案件として「阿波番茶まんじゅう」が取り上げられたのですが、関連して徳島の歴史や文化についてわかりやすく説明するのに苦労しました。知っているようでも、説明をするとなると難しいものです。今回の研修から帰ってきて改めて阿波番茶をよく飲むようになったのですが、これがなかなか良いです。後発酵茶という種類で世界でも珍しい乳酸発酵をさせているので体の調子が良くなるのです。改めてお勧めします！地元の特産品でもまだ食べたことがない（価値を十分に理解していない）ものや、徳島県内でも行ったことがないところはまだまだあるので、これからは小さなことからでも再発見をしていきたいと思います。

私にとって、今回の研修は徳島という地域を客観的に見る良い機会になりました。またいろんなシンクタンクの方々と出会いが良い刺激になりました。1泊2日の日程はやはりあっという間でしたが、中身の濃いものでした。ただ、こういう機会はなかなかないので、グループ以外の方とももう少しお話しする機会があればよかったですし、それぞれの研究員の方が今取り組まれている研究内容についても情報交換する場があればもっと充実したものになるのではないかと思います。

最後になりましたが、研修でお世話になりましたすべての皆さまにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

## はじめに

これまでの日本は産業界が中心となって、知的財産の創出とその事業化を進めてきた。バブル崩壊後、企業は生き残りをかけて自社の戦略的な事業分野に研究資源を投入し、企業の研究領域は狭まっている。このような状況の中、企業はとりわけ手薄となった将来の飯の種になる全社研究に対して大学との接点を強く求めている。また、大学も従来の教育と研究に加え社会貢献が第3の使命とされ、双方より産学官連携の機運が高まってきた。

## 産学連携の課題

大学における教員の研究成果を特許として発掘し、シーズ・ニーズのマッチングを図り企業との共同研究化に発展させ、必要に応じて公的な競争資金を活用させながら産学連携を強化する。その結果、企業での事業化が達成できれば成功したといえよう。企業においても大学からの技術移転した場合、新製品を市場化することに大変苦勞しており、マーケットのニーズを的確に把握できないまま研究開発を行っているのが現状である。

## 地方シンクタンクの役割

このようなことにおいて地域では有力な地域発の選手を一生懸命探して育てようとしているが、選手を集めてもコーチがいない。名馬を産出するには名伯楽が必要であるように、優秀な企業と優秀なサポーター（サポーター役がシンクタンクである。）が存在して、初めて地域の産業育成や産学連携による成果というものが出来るものと考えられる。

ここで地方シンクタンクとしての役割は非常に重要であり、サポーターと成り得るものがシンクタンクである。いわゆるコーディネーター役として地方の実情（シーズ、ニーズ）を把握しており、大学と企業の接点をマッチングさせる潜在能力、情報量は充分持ち合わせていると思われる。

その他においても、シンクタンクの役目として長年培ってきた他の研究において行政、中小企業、大学、NPO等人的ネットワークにおいても研究と同様に培っており、そのパイプはシンクタンクとしての研究成果による実績、その成果の信頼性を基に強固なものとなっている。このようなネットワークがイノベーションを生み出すための人的なネットワークを形成することにより、人と人との関係こそがイノベーションを生み出すと考えられるところである。

## 研修について

今回の研修につきましては、池隅さん、布施さん、奥山さん、吉原さんと非常に良いメンバーに恵まれ討論においても奥深い議論を重ね発表まで無事終了したのはメンバーのお陰だと感謝しております。また、みなさんからの刺激的な発言により、影響を受け自分自身への今後の発奮材料にもなったことも確かです。脳が疲労したにも関わらず非常に充実した1.5日だったと感謝しております。ありがとうございました。

今年度の中堅研究員研修会は「地域再生における地方シンクタンク（研究員）の役割を考える」をテーマに、北海道から鹿児島までの各地域のシンクタンクから19名の研究員が集まり、8月25日～27日の3日間、宮城県・蔵王にて開催いたしました。

今回の研修では、地元・蔵王で実際にスキー場の再生に取り組まれている生の声を聞くことで、グループ討議の議論や日ごろの業務において大変参考となるお話もいただきました。

短い研修期間にも関わらず、非常に熱心に検討いただいたシンクタンカーの皆様と、議論を効率的かつ有用な展開へと導いていただいたディスカッションリーダーの神田様に感謝申し上げます。



## 発行 / 地方シンクタンク協議会

---

〒530-0001 大阪市北区梅田 1 丁目 3 番 1 - 800 号 大阪駅前第 1 ビル 8 F  
財団法人 関西情報・産業活性化センター 気付 TEL.06-6346-2641  
2007 年(平成 19 年)1 月